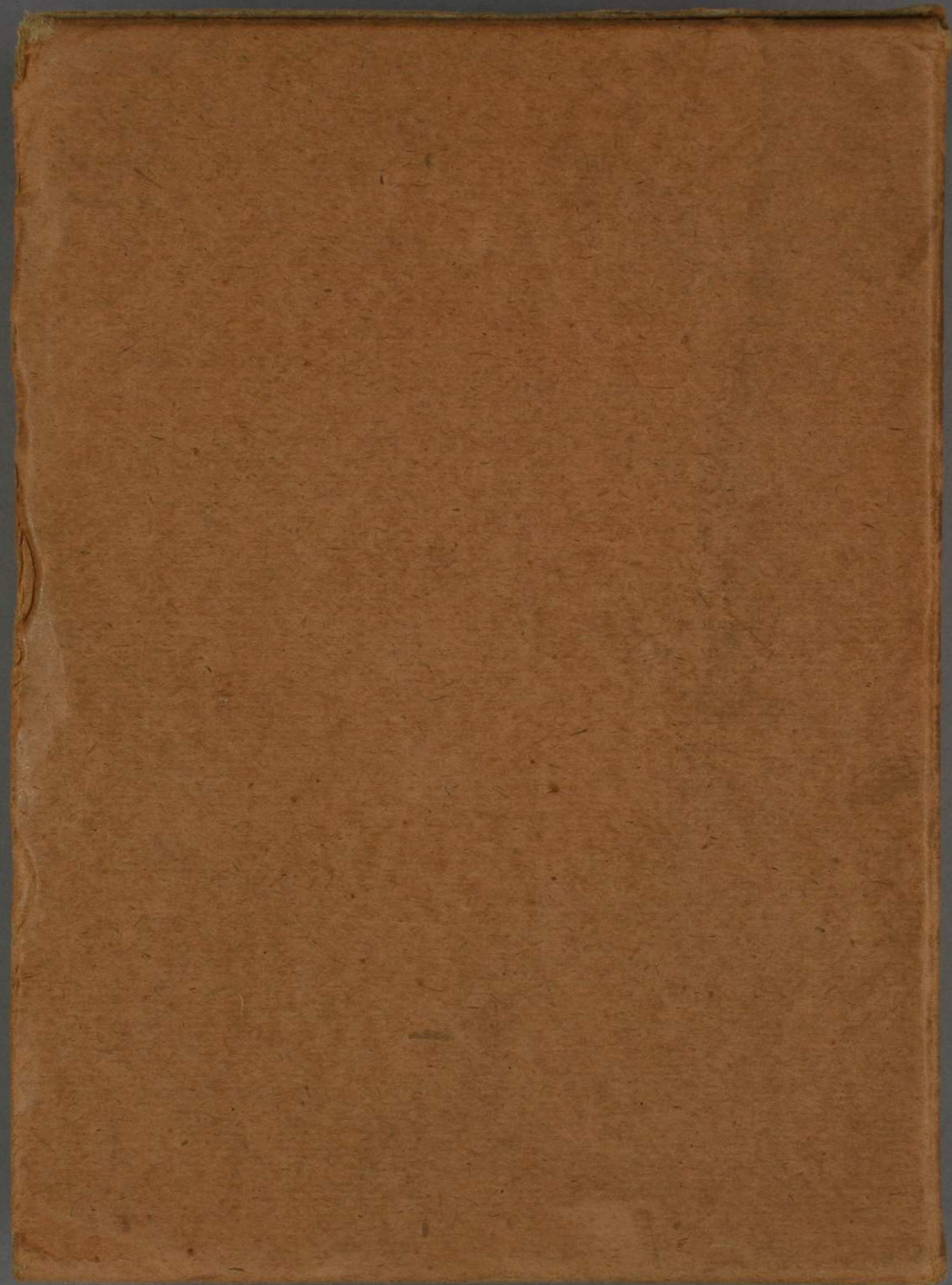
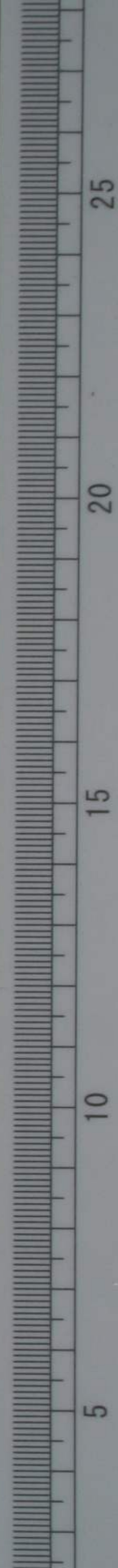
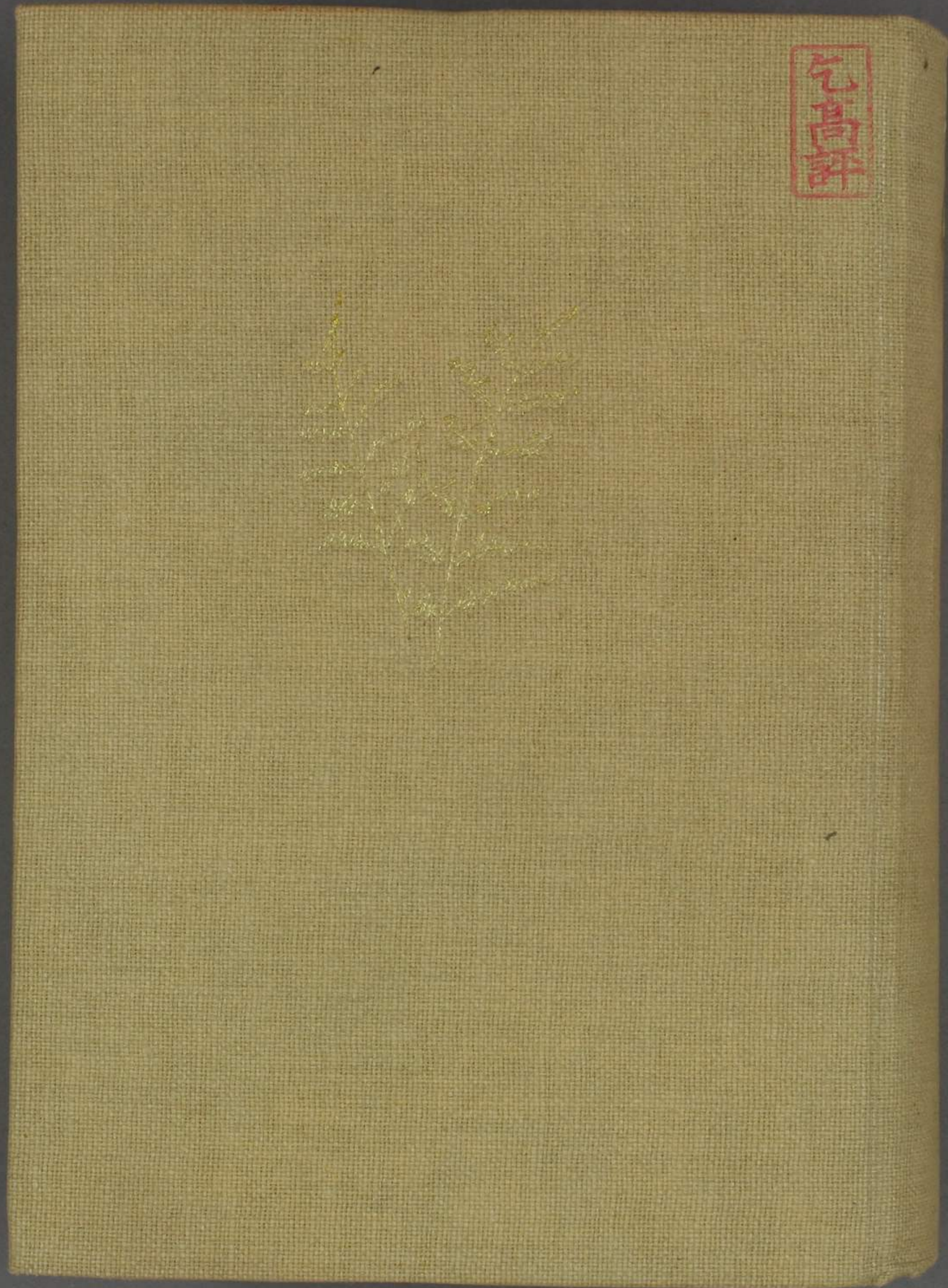


詩集

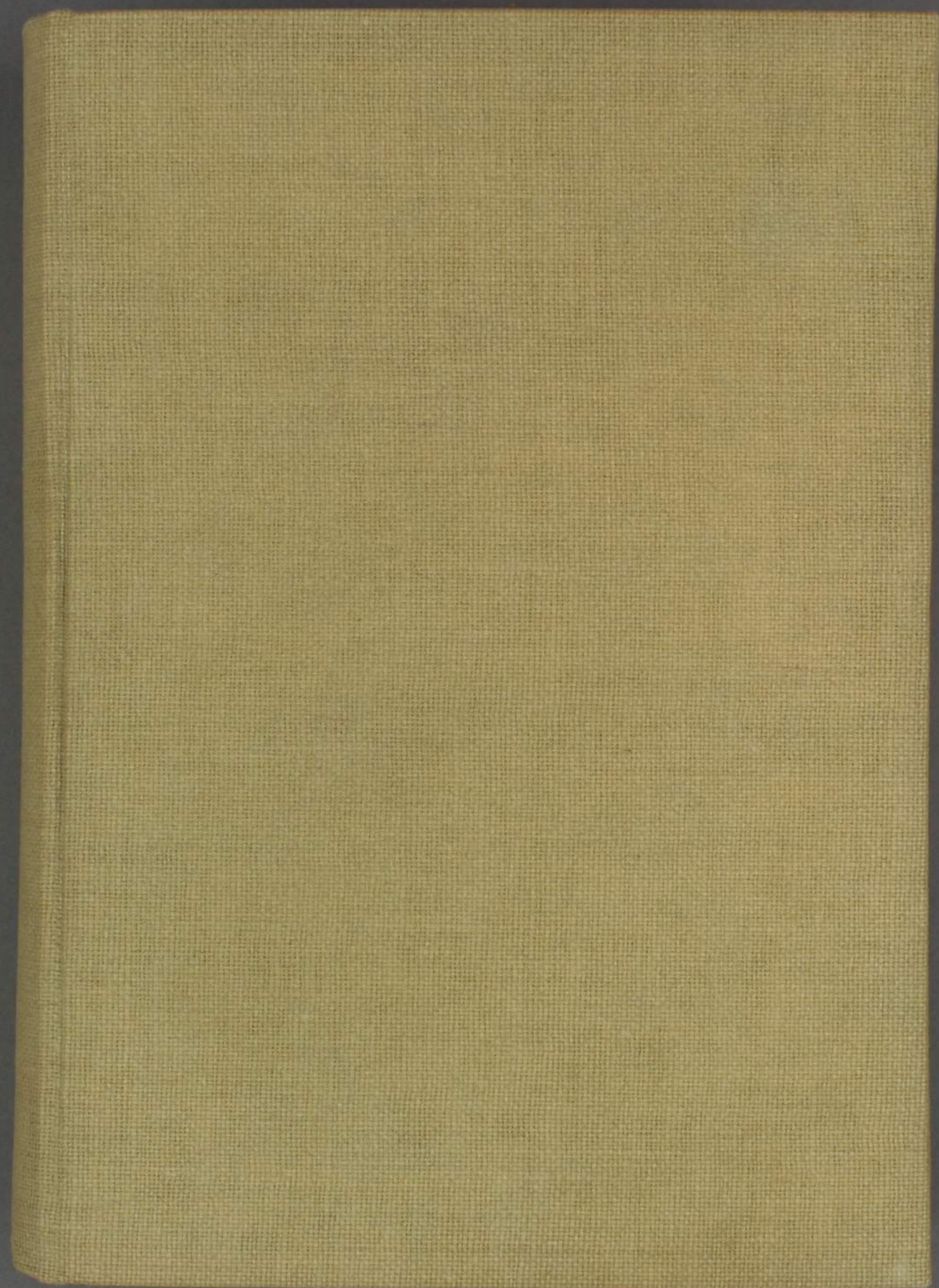
外臺集

西乃古詩集





金瓶梅
詞話
卷之九
第九十回





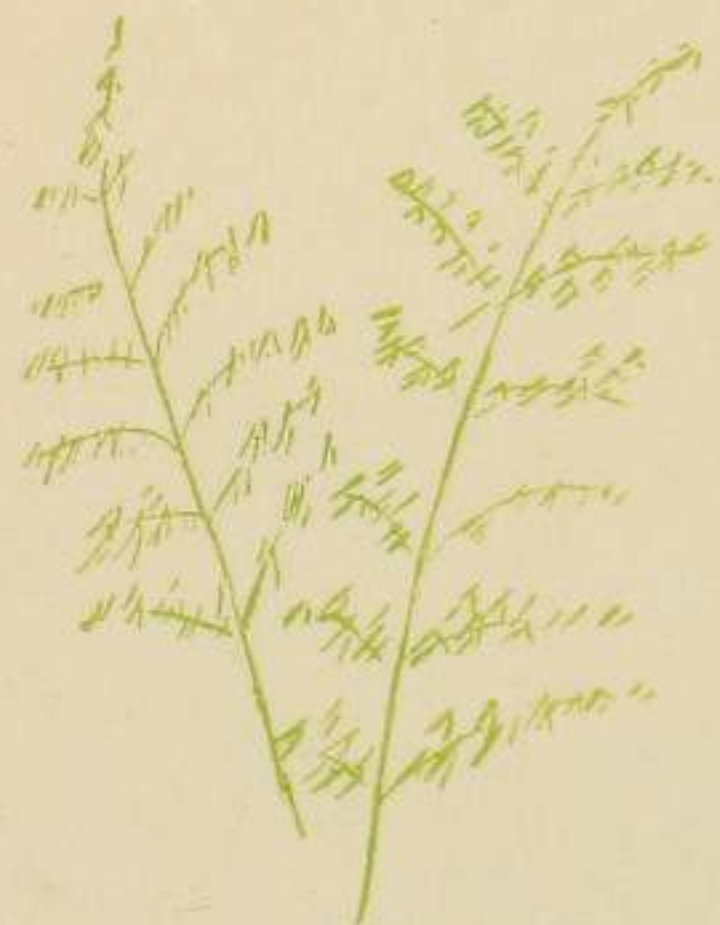
あまのこころはま

あまのこころはま



あまのこほり

めいごのたね



序に代へて

藝術の圓光

主として詩について

詩の香氣と品位といふことを私はいつも考へる。これを總じて氣品と云ひ氣韻といふのはそれである。これは巧みて成るものではない。詩人その人のおのづからな香氣と品位とがそのままそれらをその詩に持ち來すのである。

ここに一輪の白薔薇がある。その白薔薇の香氣は既にその葉にも刺にも枝にも幹にもその根にも充滿してゐるのである。決してその花にだけ突然あの清高馥郁たる香氣が現はれたのでは無い。その凡てから押し上げる香氣と品位とが、即ちその白薔薇さながらの氣韻を躍動させるのである。

この充ち満ちてゐる氣韻は一枚の薄の葉にも私たちは見ることを得る。根元より尖端に至る、それは鮮麗な緑の氣韻そのものである。

いかなる細微の、いかなる目につかぬ隈々にまで、その心を潜める事に於て、おのづから我と氣もつかなくつた深い氣韻の中に我を見出すであらう、あらゆる度ましさの美德に由つて。

眞の、つまり氣韻なるものは、むしろこの人の目にもつかぬ奥所の美德から紛々と高い靈魂の香氣を發して來るのである。外に現はるるはその餘香である。薔薇の氣品は一先づその根に於て完備し盡されてゐる故からの氣品である、美と均整とに由つて。

私はいつかいかにも端麗なある小さい海螺の素肌を見た。
 甲羅の壺から小楊子でほじり出されたその素肌は、黒と薄青とのそれは透きとほつた大理石の光澤であつた。その誰の目にもつきさうにもない、恐らくは海螺自身すらも意識しさうになり、その肌の一部には派出な海老茶色の渦巻模様さへ刺青されてあつたのである。考へると自然の攝理と云はうか、智慧と云はうか、殆神意とも見るまでに入念に丹精をこめたその模様は、否、その神技の由つて來る靈徳は、海螺の殻の外までも、否、海螺全身の氣品をさへ、その内面から冷えびえと整へさしてゐたのである。

で、蝸牛には蝸牛の、蝸斯には蝸斯の特種の形態を透しての、それぞれの生命の氣品がある。いかなる葉にとまり、いかなる穂草の芒のきに飛び移つても、その度ましい氣品は損はれない。露を吸ふものの新鮮さと生きものの素朴さとを以て、而も均整された形態の美は、たとへば逆さとんほうつても、却つてそれは動くものの生きた韻律的の美をさへ添加する。

詩の一つ一つの氣品も要するに詩人その人の内に深く潛められた度ましき、奥ゆかしき、充ち満ちた靈魂の信實、その底の永

生の神格さういふものが、おのづとその人の氣品となつて外に現はれたものである。言葉或は韻律のみから生じたものでは決して無い。つまり外から人爲的にたやすく紛飾し得べきものではないのである。いかなる妙技を以てしてもその人に無い氣品は決して表はせる筈はないのである。その人にある。

これと反對に、不純な若しくは粗暴な、傲岸にして騒ぎ易く、信義なく誠實なき人から、對境からいかなる氣品ある詩も決して生じ得る筈はないのである。恐懼しなければならぬ。

ここに私の云ふ氣韻といふものを、世の似而非風流者、俗南畫家或は無智な骨董商等の云ふそれと同じに見る事は非常な誤謬を生ずる。また品位といふものを、道德的高潔性のみを指したものと見てはいけない。藝術の氣品は美の香氣の氣品である。最上の詩の氣品若しくは氣韻は世の善惡の上にある。

萬有それぞれに一々の香氣と品位とを持つ。一莖のほのかな白芥子の氣品を知つて、かの蒼穹の圖り知る可からざる香氣の崇さをふり仰がぬものは禍である。

また氣韻なるものを、最少限度に解釋する人は、さうした思慕へ向つての根本精神の鍛練を以て、寧ろ隱者風の消閑の遊びとする。これも思はざるの甚しいものである。氣韻は詩の大小には關せぬ。小曲と大管絃樂とは關せぬ。いかなるものにも充ち溢るる氣韻は畢竟するに、その本體なる作者その人の靈魂の氣品に因由するからである。

微風にも微風としての氣品があり、大暴風にも大暴風としての氣品がある、これを思はなくてはならない。

二

ここに一つの林檎がある。この香りのすばらしさは、一目見て私たちはその林檎の香炎にうたれる。香りそのものの本體が一つの生き物となつて燃え上る、その炎の輪光。これは圓い林檎の本質から來る生命力の香炎である。その時その深紅の林檎は單なる赤紅のそれで無い。その雪白の心核から淡綠色の部厚な果實の内味を透しての、その外の深紅である紫である、その綜合の生きた球體から新鮮無比の香炎が立つ。林檎が内から躍動する。この魅惑。

私は曾て飛んでゐる柘榴の圓光を、放射光を見た。銀光燦爛たる海面の上、強く投げられた紅玉の果が、その生々しくひわれた柘榴が、宙に一つ大きく躍つた時、その瞬間、かの柘榴の本質的な香炎は更に數倍の輝きとなつてたちまち柘榴以上の聖となつたのである。この動律の光りがやく美。

近代科學の進歩は既にかの燕麥の穂に或る特殊の背光を認めめた。のみならず、また、個々の人體より發する個々の香炎をさへ認めてゐる。そのえんえんと立騰る香氣と色彩との相違は

その人自身の靈肉の生活力、その生命力の強さ弱さ如何にあるとされてゐる。而も人間の激しい感動——たとへば歡喜、哀傷、憤怒、怨嗟、癡嫉、戀慕、憎惡、悔恨等。或は清く澄み輝く心象——純愛、信實、信仰、慈悲、さうして智惠。又は弱々しい否定的な心狀——銷沈した、癡痺した、冷笑風の、淡々たる。さうした、各種の情念と意力、加ふるにその動律の密度如何によつて、紅、黃、紫、綠、さまざまな光の輝く香炎をその周圍に發散させるといふのである。かの不動の火焰、若しくは佛陀、基督の圓光はまさしくこれを直觀したのである。すばらしい象徴。

私の友人に一人の狂者があつた。この男は人體の香氣如何によつてその友情をしばしば變へた。殊に自分の好まぬ香氣の持主をば絶體に嫌忌した。彼の母親の如きは最も嫌忌された一人であつた。この狂者の愛憎はあまりに極端な例證であるが、必ずしも笑へない同一の愛憎が私たちにもある事を否めない。それを驚くのである。よく蟲の好き嫌を云ふ。この蟲なるものの愛憎は、私たちそれ自身すら氣もつかぬ潜在意識の上に、すでに相手の香氣と炎光とを確に感知した上のそれであるか知れない。蟲とはこの奥に潜んだ靈魂の直覺性を指すのであらう。

この見えざる炎光の本體、生きつつ生きてゐる生物の各種の美と、それから來る魅力と、蠱惑と、而もそのなまなましい直接の香氣と色彩。而も無機物と思意されてゐる鑛石たちの上に、まるで凡てに驚かれる事のいかにこの世界は輝きに充ち満ちてゐるかを、まづ考慮の中に入れて置いてもらふ必要がある、これから私の云はんと欲することについて。

さて詩であるが、詩にとつては詩人はとりもなほさずその唯一の創造主に外ならぬ。同じ理で詩そのものは詩人自身の純

一無垢な創造物であらねばならない。すでにその人から切つて放れた詩は瞬間に潑刺たる薰り輝くばかりの生物となつて飛ぶ。この生物の一つ一つはまさしく一つの林檎のごとく、白芥子のごとく、蝸牛のごとく、蠡斯のごとく、或はまた棕櫚の如く、豹の如く、時としては風のごとく、溪谷のごとく、それぞれに生命あり、氣品あり、香氣と香炎と香韻とそれらのあらゆる包含體で無くてはならない。個々特殊の美と魅力と靈感とを以て、而もそれらは極端に直接性を有するものでなければならぬ。

戀は一目より初まる。詩もまたその第一音から魅了する。

すぐれた詩の持つ天稟の氣品、馥郁たる香氣、その美感と靈感とは直接に人をうつ。思慮の外の魅力である。たとへば、それが未だ言葉といふ言葉の意味すら通じない嬰兒に於ても、讀んでさへ聞かせれば、そこに何等かの恍惚感を誘致する、それほど快美な音律は傑れた佳い詩には必ずある。無論これは音楽についてもいよいよ云へる。私のところの嬰兒は生れてまだ二十日も経たないうちから、レコードが奏する泰西の名曲に對しては、直ちに啼き止み、而も靜かにおとなしく聽入つてゐた。何といふことなく快美の感覺にうたれたにちがひない。百日

あまり経過した此頃では、彼の子はその父親の歌ふ父親自身の創るところの童謡の一端をも撰擇する。さうして時には聲をあけて笑ふのである。彼の子の無心の鑑賞は決して謬つてはゐない。彼の子の喜ぶ童謡は矢張り何かに他のそれらより以上の快美感を誘ふものが多分にあつた。それは矢張り父親の作ではいいものであつた。個々音韻の上から洗練され、或はその連続から、突如として思はぬユーモラスな動律が生ずる、さうした時彼の子には殆んど無意味であるべき筈の歌詞に對してそれは極めて直感的な笑を放つ。これは言外の詩の香韻そのものの感じでなくて他の何であらう。

烈日の下、かの黄金色の向日葵に近づく兒童は、また直ちにその大花輪の香炎に於て、緑の部厚な而かも大きな廣葉と、その太い水々しい同じ色の莖と枝とに於て、そこに充ち満ちた植物の活力と氣稟とを直感するであらう、その第一印象に於て。結局生命の活力と、情念の香氣と、炎光とに於て充實され完備された個性の表現そのものは藝術そのもの、詩そのものの魅惑であるからである。

このいささか粗大なる向日葵の印象を別にして、最も崇高な

る例に於ても、かの高山の靈感にうたれ、雪溪の氣品に胸もつま
るほどの感激は兒童も持つ。ただ成人は、思想家は、藝術の修練
者は、かの無心の兒童が單に直觀したその本質の美を更に深く
觀、更に多く識り、更に高く瞻仰するのである。而も第一の印象
は凡てに共通した無上の香韻、完全されたその本質的表現その
ものの美德にうたれる恍惚放心境の快感である。

再び云ふ。詩もかく天品の現はれであるべきである。創造
の詩はかくの如く、自然そのままの素肌で全體で他の胸をうつ、
その玲瓏と透徹とを先づその氣稟に持たねばならぬ。香氣と

香炎とはおのづからに立ち騰るであらう。

ここでかうした事が云へる。

詩人としての態度の重厚さ、或は信心の篤さ、或は智識の豊富
さ、従つてその題材の崇高なる、或はその思想の深遠なる、それら
がいかにか偉大らしく熾烈らしく思はしむるその詩にあつても、
藝術としての最大要素たる直接性の香氣と魅力とを缺いだ非
感覺的非韻律的の詩ならば決して純粹な詩、藝術としての純粹
な詩では無いといふことである。第一印象に於て讀者を理非
の外の微妙恍惚の至境に誘引し得ず、ただ態度若くは思想のみ

を極めて概念的に目に立たせ、而も一々に理智の判断のみを強ひに強ひる高壓的の詩は、ただ他の感動をして困迷させ、停滯させ倦厭させ、さては徒に沙漠に道を求めしむる如き索然たる恐懼心を抱かしめる。かくして作者と讀者とは終始明確に對立平行するの止むなきに至る。而も一は威嚴を示すことに於て、一は卑屈ならざらんとして相互に空しい儀禮を作るにこれ努めるといふ風である。元來詩はかうしたものでは無。もつとうち寛いだ自他共に圓融放心の無我の境に遊樂流涕す可きものである。かくその本然的の美と香氣とを以て、抑もから一氣に他を自己の詩の世界に牽引し、抱擁し、陶醉、落涙せしめ得な

ければ何として無上の法悦が蔽うて來ようぞ。

ここに於て私は酒若くは香料の美德を思ふのである。また時には無智な美女の癡笑をも。

私はまた微笑する、やや寂しき表情に於て。

『詩よ、お前の創造主がたとへあはれな靈魂の不具者であらうとも、おまへはあまりに卑下せぬがよい。おまへの與へられた特殊な香氣と魅惑とは何としても矢張り美德の一つであるからだ。』

詩人が自然相の靈氣と神機とに觸れ、或は人間思慕の愛慾に身を涵した時、その聖なる愛熾烈なる情念、清澄なる叡智、それらが茲に白熱圓融して所謂眞純一如の韻律ある香炎體となる。これが詩である。詩となる法悦時の此の白熱圓融の至妙境に到り得ずして、思想のまま素材のまま埒無く投げ出したものに現今の詩の殆どがある。詩としての氣品も香氣も韻律も乏しき是等の散文系の自由詩なるものは詩でなくて詩となる前の何

者かである。詩人にとつて最も大切な煉金の熔鑪爐を是等の作者は持ちあはさぬのだ。

詩の言葉について云はう。

詩人その人の感動の内律、その内律が機縁熟して一時に外へ向つて奔溢する。その時言葉はさながら韻律の波を織つて茲に初めて縹緲たる靈妙の音を成す。靈感の受胎より詩の創生に至る、この妙境の法樂は生れたる天與の詩人にあらずして、誰が果して豊滿に享受し得ようぞ。この最上の恩寵に浴し得る

光榮ある詩人はまさしく祝福されてよい。鈍根自らの如きはただ深く恥づるのみである。

云ふまでもなく詩の表現は一に言葉を以てする。この言葉の藝術たる就中その精髓たる詩は、その言葉を以て他の音の藝術色の藝術、その他と相對峙してそれ自身特殊の美にして、聖なる不可侵境を創造する。藝術が個性の完美なる表現にあるならば、詩は言葉を以てする個性の完美なる表現であらねばならぬ。この理由によつて言葉を尊重しない眞の傑れた詩人といふものは有り得ない。言葉などは表現などはどうでもいいと

いふ所謂内容詩人の増上慢は斷じて許すべきでない。詩に於ては内容即形式である。一にして不離である。このデリカシイを感じ得ない人は詩人ではない。

言葉の一つ一つはかの黒と朱とのてんたう蟲の如く、翅立てて鳴る。微かに鳴る。或は螢の燐光、時計蟲の關節音、それらの如く光り或は響く。ある時にはまさに生れんとする卵の中の小鳥の雛の如く殻をかぶつて啼く。言葉の一つ一つは凡てが生ける言靈である、生物である。その生物としての言葉の本質はことごとく神祕である。その言葉の持つ一つ一つの音韻の感覺

は極めて本能的な生物の必然性によつて恵まれてゐる。而もこの生きた言葉はあまりに幽かなるが故に、又あまりに新鮮なるが故に、又自らあまりに潔癖なるが故に、往々にして氣死し、自殺し、相殺する。この微妙な氣品あり香氣ある生物に對して、不遜と粗暴と不謹慎との啓遇若くは機智的戯弄は絶対に敢てしてはならぬ。見たところ、詩人のほとんど多くが、この言葉の一つ一つを不憚にも無知無識につまみ殺してゐる。殺された言葉は死骸の儘に恣に羅列される。死語死調の詩が成る。かうした詩が無氣無力で其處に何等の芳香をも魅感をも發散し得ない事は寧ろ當然過ぎるであらう。詩人にとつては、この言葉

を殺すことは人を殺すことよりも罪惡である、極惡である。恥ぢて死ぬべきである。

言葉はその氣息のまゝに、句は聯は生きたさながらの韻律に顧はして初めて香氣あり香炎ある詩の創造となる。この生きた言葉の句の詩に於けるは、かの繚蟲の各關節に於けるが如く、個々に生きてまた生きた綜合體となつて躍動する。光へ光へ、すばらしい光の嵐の中へ。

言葉の前に跪坐し禮拜すべきである。而して眞に熱愛すべ

きである。知れるかぎりの言葉は知つてその本質の美を輝かす事に於て詩人自身も光り輝くべきである。眞に言葉は風味し理會すべきである。學者は言語學的考證の上からその出所典據を究理する。然しこれは言葉の生死若しくはその経路について純然たる歴史的興味を持つのである。而も愈々その研究は細に入り微に入りつて却つてその本質の神韻を見忘れる。詩人の風味するところは一に俊雋なる自己の感覺より直にその神を捉へる。色聲觸味香個々の言葉にはそれぞれの各官能に亘り、本來それぞれの個々の特殊性が直に微妙な混融状態に於て燦爛として深く秘められてゐる。實に彼等は清新であり、

神祕である。觸るれば觸るるほど。實に彼等の人間的な氣息の親しさは、實に實に涙も流るべき人間の愛着を感じしめる。その言葉に對する感覺の洗練、極めて藝術的なるべき眞の鑑賞の修練は心ある詩人の夢寢にも忘れ得ぬ法樂であらねばならない。この磨かれ研ぎすまされた新鮮なる感覺を以て、彼等言葉の個々を識別し、その適所に於て一々に、而も的確に生かし躍らすことは、詩人としての純愛であり天職でなくして何であらう。かくして詩に何物にも譬へ難い高貴の豪壯の華麗の典雅の清冽の甘美の蒼古の又は幽寂閑靜の諸相をおのづから體せしめるものは、全くその言葉の吟味詮衡の如何にある。

個々の自然相若しくは個々の人間感情の象徴として、如何に言葉なるものが感覺的であり、精神的であり、本質的であるか、これを思ふと、實に驚嘆されるのである。少くとも初めて言葉が成つた、その時の原始人の感情感覺が如何に直接性を帯び、又如何に眞摯で素朴であつたか。それはさながら翻る野菜の葉の如く、飛び跳ぬる野兎の如く、溪流を流るる紅い桃の實の如く、凡てに生々しく觸れ、觸れて踴躍し、感激したか。象徴としての言葉が如何に的確に事物或は感情の本質に直入したか。これは事物の名詞のみについて考へても思半ばに過ぎるであらう。

全く言葉は此の如く本然的に創造され、具體化されたものにちがひない。人類最初の象徴藝術の第一歩として。

而も、文化の進歩につれ、時代相の推移につれて、言葉もまた愈々洗練され、淘汰された。更に新らしい感情感覺によつて生れた新しい言葉が、愈々細かな複雑相を具現しつつ、常に的確にその時代の芳香を薫醸し創造する。此の言葉の世界の本質的官覺的美觀は思ふだに天上の燦爛相を忍ばしめる。

而も時代に一步先んじて、此等言葉の精靈に水をそそぎ、熱を與へ、死したるを除き、生るるものを祝福し、香氣高く、常に清新なる、常に玲瓏たる、常に光輝あるものたらしめる洗練と感覺的選

擇とは、再び云ふまさに天寵ある詩人の與へられたる最美の職分であらねばならない。此の言葉の鍊金。

詩の言葉はもとより此の如く、眞の觸角によつて選ばれるべきであつて、決して或る術學的の趣味、骨董癖、或は考證的矜驕を以て恣に弄ぶべきでない。この時言葉は如何にこれらの非禮と不遜と酷使と虐遇とに憤怒するか。凡ては悉く索然として白化し、而もただ腐れた死魚のごとき肋骨を野晒にする。その肋骨の羅列の上を、如何にまた彼の傲岸なる思想と知識の幽鬼が、深刻氣に、而も堂々と睥睨し濶歩するか。讀んで先づ第一の印

象に於て不快を感じ、倦厭を感じるは、かうした詩人其人の本來の性格態度に基因するのである。此の誤謬を自ら悟らねば禍である。

詩の言葉は實に實に節約すべきである。實に實に愛惜すべきである。一の内容を現はすべく最適確の言葉、その尊い言葉は此の現世にたつた一つしか無い事を、眞に知り得るならば、眞に眞に愛するならば。

同じ言葉と言葉とを、その同じ色と色とを、その同じ觸と觸と

を、その同じ味と味とを、又その同じ香と香とを、何の尊敬なく何の急處に象眼することも無く、ただ漫然と近接せしめてはならぬ。言葉と言葉との相殺、恥死、憤死がここより生ずる。かく不鍛練不親切であつてはならぬ。眞に愛するならば。

言葉は文語口語の何れを問はず、一に最も純なる心に純なる時に、純なる言葉をそのまま純なる適所に生かさねばならぬ。眞に愛するならば。

言葉をして言葉たらしめねばならぬ。日本の言葉をして眞

に日本の言葉たらしめねばならぬ。

おお、この日本の言葉について感謝しよう。私たちのこの日本の言葉、言葉の幸ふ國のこの言葉、まさに掌を合せて禮拜すべきこの言葉。

この比類なき日本の言葉を貧弱だといふ人、その人は恐らく最も貧弱なる理解と、又最も貧弱なる用途しか爲し能はぬ技巧凡下の當人では無いか。

私は思ふ。この日本の言葉はあまりに豊満すぎる、あまりに感覺的であり、本質的すぎる。これらを眞に殺さず生かすことの如何に至難なるか。この個々の言葉の特質を、一々咀嚼吟味

する事に於て、私は私の一生を暗しても而も、私自身の能力の不
足を感じる、眞に感ずる。恐らくまた今の日本に於ても日本の
言葉に對する眞の理解と神通力とを、その血を血とし肉を肉と
し得る神才の唯一人も無いであらう。

日本の言葉を以て日本の詩を。——眞の日本民族への郷土へ
の郷愁を持つならば、眞に日本を愛し、また我自身を愛するなら
ば。

言葉の陰影を、言葉と言葉との色合を。——眞に言葉の香氣と、
光炎を愛するならば、眞に言葉の明確を喜ぶならば。

詩の言葉の明確こそは大切である。如何なる感覺の暗示に
も言葉それ自身が朦朧で難解で、意味不明であつてはならぬ。
眞の詩の神祕性は決して言葉の朦朧難解から來るのではな
い。詩人その人の思想の深さ、觀照の鋭さから來る。而も言葉
の節約から來る。

ここに紅と緑との林檎が二つある。紅は紅、緑は緑で何れも
明確である。而もこの二つがこの如くこの卓上のこの時間に
重りころけて深く深く相親しみ、色と色とを映じ、香りと香りと

を混へ、影と影とをほかし、本質と本質との接觸を愉樂し呼吸することは眞にこれ千萬年にただ一度の機會である。この再びなき機縁を二つの林檎も感謝し、これを觀る人も亦眞に禮拜しなければならぬ。かうした場合、紅と綠とが愈々明確である故に、その中間の色合は、陰影は、その背後の空氣は愈々深く、愈々美しく搖曳する。

言葉もその如くである。極めて節約された、極めて尊むべき千載の一遇に於て極めて明確に近接された言葉と言葉とは、愈愈神祕の陰影と、その陰影の奥所の眼、その叡智の暗示の潛光と

を、私たちに閃閃と放射するであらう。言葉の朦朧はその陰影をも却つて淺くし、實と虚とをただただ混亂せしめるばかりである。

思へ、象徴若くは傳神の至妙境にあつても、繪畫の線は飽くまで正確に、詩の一語は飽くまで簡素なるべき事が、即ち東洋藝術の最高最上の眞諦ではないか。要するに詩の神祕或は幽玄の風致は極めて言葉を尊崇し節約する。敬虔にして森嚴なるそのただの一點から來るのである。極度に惜しまれた言葉の餘韻——とりもなほさず、氣品ある靈魂の餘韻——餘徳であ

ああ、言葉は象徴詩の中にあつて最も光り詩は象徴の極にあつて初めて、曾て見ぬ端嚴崇高なる金色の圓光を放つ。これ詩の最極である。絶対境である。

四

微風は、小竹の葉の揺れを以て、初めてその姿を示現する。小竹の葉はあまりに繊細に、そのそよぎも亦あまりに複雑限りなきを以て、まことにその姿は幽かにして捕捉しがたい。幽かな

る幽かなる詩の韻律は、ただ心を以て神を傳ふるのみである。かくの如きはただ句を句とし、響を響とする。月の夜ならばなほさらである。

詩の韻律はまた雷雲の下、光りかがやいて而もそよとの風も無き日中の空にあつて、纏れ狂ひ纏れ狂ふ、双つの寤蝶のごとく、ただ忘我の色と線とを、白く、或は肉色に、桃色に、閃めかし、漂はし、而かもひらひらと旋轉し、つつ消なば消ぬがに昇つてゆく。續いて大動亂が来る。雷雨が来る。霹靂が鳴る。

詩の韻律はまた、紅く青き脚光に照らし出された踊子の細い素足の爪先にある。直立し、廻轉し、飛翔し、踴躍し、低徊し、舞踏するこの爪先の燃ゆるがごとき情念と形態の變幻とを見るがい。何たる妖艶、何たる動律。

詩の韻律はまた溪流の飛沫のごとく、鳴る鐘の餘韻、波濤の泡、綠雨に亂れる千鳥のむれ、或は足音忍ぶ猛虎の憂鬱にも似て、心律さながらの動きを動きとしつつ時に散亂し、また集聚し鬱積する。

林泉の静けさに一音生じて、神機啓く。詩の韻律も亦この不動の緊張の極にあつて、初めて神來の響を生ずる。東洋藝術の眞髓はこの動亂の前の金剛不壞心である。今や將にその心の極りて破れむとするその瞬間の形こそは、詩の神の生きる瞬間の姿である。

詩の律は絶えず、言葉に絶えて而もなほ縹緲として舞ふ。空に煙る。ああ、時雨を時雨とせよ。而もなほ、白芥子は時雨の花の咲きつらむである。

完全なる一本の木の姿は、むしろその前後左右の空間を観る事によつて初めて全體が認められる。詩も亦かくの如く、要はその空白を後に残すにある。隠微と省略とは詩の極意であるからである。水中の睡蓮を見よ。

散文は歩調正しき兵隊の足並である。一二一二である。而も近時の散文系自由詩は、盲目の手つなぎ、一二三四五六七八九十である。詩の動律は一より十に飛び、二に遷る。或は十より一に飛び九に遷る。燕の飛翔、布晒しの布のひらめきを見よ。

機智のみによつて眞の詩は生じない。眞の感覺的根據無きかざりは、眞の詩の動律は生じない。

要するに最も自然なる最も親愛なるそれさながらの流露を表現の至上とするには、詩人は常にそれ自身の呼吸、心音、内律の如何に耳を傾くべきである。而も終始實相の神に觸ると共に、ただ有りの儘の姿、有りの儘の心を以て、常に主客一如の圓融境に深く呼吸すべきである。象徴の秘境はここより生じ、眞の自由形はここに成るのである。

敬虔なる自己と自然の觀照を尊重し、おのづから湧き上る心の韻律を隱約の間に捉へて、これを靜かに命ある言葉に外律に移すといふ自由詩本來の提唱はまことに謂れあることであつた。然しながらそれも詩としてであつた。飽くまでも詩の動律を、詩の風韻を、詩の品位を保つた上での自由詩であるべき筈であつた。無論この自由の意味は放肆放埒の謂では無かつた。詩を散文に變へよといふのでは無かつた。

思ふに、新を趁ひ、自由を叫び、舊を憎み、均整を嗤ふ人々の急進的態度にも、可なりの無理解と反感の暴露がある。之れに對し

て短歌俳句等の完成形式に據る人々も、あまりに古典になづみ、舊に淫して、曾て之れ以外の新世界展望の歡びを知らぬ。敢て爲ようとせぬ。これは兩者とも自己の偏執に謬られてゐるのである。

本來、實相に新舊のけぢめは無い。常に正しく新らしいからである。これを舊しと見るは視て以て馴れ過ぎた結果である。觀て馴れず常に初めて觀るが如く觀る時には、實相の凡てが愈新らしく眼に映るであらう。再び云ふ。實相のまことこそ常に正しく新しいものである。いつ觀てもまことなる事に於て

漁りは無いのである。つまり観る人次第である。芭蕉の説いた不易はこの永生の流れに通ずるまことの詩の精神である。詩の正風はさうした精神に根柢を置く。この東洋藝術の根本義を忘れてはならぬ。

ただ一時の流行につれて、詩の本元を思はぬ人は眞に禍であらう。眞の實相の神祕は珍奇と新様の中に光らずして、極めて常凡の奥に極めて有りの儘に潜む。ただ心境高く靈覺鋭き人にのみ愈々その常凡は深さを増すのである。ああ、此の自然の閑寂相、無常光明。

形式の均整と完成、舊慣と古蒼とについて、眞に一切の苦、一切の不自由を體驗し盡した人にして、初めて自由の歡喜と價値とが光るのである。無技巧と云ふも技巧上の一切の鍛鍊を盡し、彫心縷骨の極、初めて自然の有りの儘の、即ちさながらの素朴と眞純とに還れるのである。之等一切の忍苦と、虔讓と、誠實とを経ずして恣に自由を叫び無技巧を唱ふる、輕薄甚だしと云はねばならぬ。見よ、いかに其處に自信無き大聲と、氣品なき喧騒と、雷同と、不見識とがあるか。いかに其處に未熟低劣なる行と行との連結があるか。いかにまた其處に詩ならぬ放埒と不節制

とがあるか。

あながちまた短歌俳句俚諺の如き既に完成された詩の形式のただに舊しとして棄てられざる理由に一はそれ等に今にして滅びざる必然の永遠性を存する無くして何であらう。少くとも日本に於ては、日本人の感情、日本人の語脈に於ては、それ等は思ひ棄つ可からざる醍醐味である。ただ古語死語になづみ、舊見に囚へられ、一に自己の新鮮なる觀照に據るを忘れ、その形式を更に詩の一形式とし、自己の血とし肉と爲し得ぬ、單なる隋力行に於て、かく人々は墮落するのである。

その時により、その人により、いかなる詩形の採用をも許さるべきである。それが内律の表現に於て、最も正しとし適應したるものと認められた時に、ただこの最も當然の純なる要求無くして、その手刷れたることにより、舊慣により、隋力により、或る一二の既成形式に偏執し、蟄居する人々は、遂には單なる造花製作者と等しいであらう。造花は何の蝶をも誘引せぬ。

卵は卵であるが、あの生みたての卵そのものの新鮮さは、見刷れたる卵なるが故に決して之を舊しと見る何人も無いであら

う。一々の生みの苦しみを經た、一々の相、一々のフレッシュネスが光つてゐるからである。短歌俳句の如き既成形式を採る場合が縦し私たち自身に有つたにもせよ、私たちに先づ必然にかくあるべき理由により、而もその形式を眞に創造した原人の歎びと熱意とを以て採る。而して全く自己の血とし肉として、さながら生みたての卵のごとく、生れたての白き蝶々の如くに、初めて爽快に藁に落し、またひらひらと草の縁に動かさなくてはならない。ここにその舊形式は忘れられて、新鮮な生の表現のみ光る。かくの如くならば採つてわるくは無い。

字句の洗練、手技の鍛冶は、却つて定規あり不自由なる短詩形の中に於て眞の修道を得る。私自身の經驗よりするも全くこの一切苦の中にあつて漸く今日あるに至つたのである。決して有るべく思はれぬ自由も動律の變化も、實に驚くばかりにその定形式が包蔵してゐたといふことは全く奇蹟とさへ思はれるのであつた。これは全く須彌山を一粒の芥子に包蔵する、あの尊き、光り輝くばかりの藝術であつた。藝道の修業といふ事は盡くるところを知らぬ。知りて且つ飛躍するはいい。知らずして物を言ふは恥である。

字句の洗練、手技の鍛冶、いな、その修道は心境の洗練、精神の鍛

治に外ならぬのであつた。

殊に萬物の觀照に於て、眞の傳神の祕法、象徴の奥儀はこの日本固有の俳句若くは短歌の如きに初めて、世界無二の光輝を放たれたのであつた。佛のマラルメの象徴の如き、近時また流行するところの TANKA, HAIKU の如き、香壤の差である。後者の如きは實に幼稚極まるものである。

私は詩歌の諸體に出入し、二十幾年を経て、今漸く眞の自由律と無技巧との徳性を知りかけて來たやうな氣がする。而も知らざるは前と同じである。否、愈愈知り能はざるのみを知りか

けたまでである。

詩歌の道は畏れ入る外はない。

五

詩の氣品と香氣とについて、更にその言葉と形式とについて、私は既に思ふところの幾分を述べた。茲に於て愈々藝術そのもの、詩そのものの圓光について、此の詩論を結ぶ。

藝術は藝術詩は詩である。詩はこれ善惡不二、理非無く、微妙にして恍惚、實にして虛、神意にして魔法、現識にして幻想、華嚴に

して閑寂光明にして無常、ただ美、ただ聖、謂ふところの言語道斷の心境にあつて、かの哲學宗教自然科學の圏外に、常に高く超越し、飛翔し、遊行し、奏樂する。

眞の詩の徳はまた、此の苦界を眞の極樂たらしめる、眞に實相の光耀と美を観る事に依て。また眞の神祕に滲透して、不可見の靈界を眼前に象徴する事に依て。而も此理に依て、他の如何なる哲人若くは科學者或は爲政者たりとも本質的に眞の詩人ならざる限り、決して最高のそれ等たり得ざる事も立證される。而もまた如何なる民族の如何なる階級に於てすらも藝術を知

り、詩の薰香に憧れ、この詩を通じてまた靈魂の舞愁を感ぜざるは無い。否、寧ろ彼等はその宗教をさへも、寺院をさへも、詩の歡樂境として遊樂し、放歌する。日の照るところ、野菜の翻るところ、魚鱗の光り、鳥の啼き、積藁の新しく濡れ薫るところ、春夏秋冬、一として祭の笛の鳴らざる處無く、鉦鼓の響かぬ處は無い。勞苦にも歌、戀慕にも歌、哀傷にも歌、たとへ低劣なりとも民衆は民衆の感情を歌に寄せて、互に憐憫し慰安するすべを知つてゐる。風につけ、また雨につけ、酒とともに終始彼等の忘れがたきは、即ちこの詩であり歌であるのである。詩歌なくして何の人生であらうぞ。何の人生の精華があらうぞ。

詩は、而かも人生の精華たるとともに眞に藝術中の精華である。世に詩情なきまことの音楽家、畫家、彫刻家、或は建築家、工藝美術家は有り得ない。無論眞に傑出したる藝術家ならば先づ彼等は必ず眞の詩人たる天稟をば最も豊滿に享け得たに違ひないのである。

藝術自由教育の提唱者の一人として、私のつくづく希望することは、凡ての教育家——主として小學教師が——先づ自ら詩人たるべきことである。詩人たらずとも詩を、藝術を眞に理會す

る程のその教養を切に願ふものである。一方兒童の凡てが天才であり詩人である時に兒童の詩をさへ鑑賞し得ざる教師のあまり多くが其處にある。此の現在の教育に於ては教師それ自身が先づ詩を教へられてあらねばならぬ。それはあまりに悲しむべきではないか。

さて、再び云ふ、藝術は藝術、詩は飽くまでも詩であると。

藝術は詩はそれ自身に於て生くる。決して他の主義主張若くは布教宣傳の爲めの方便品ではない。若しかかる方便として藝術を詩を煩はす時には、その藝術は詩は最も眞純なる意味

に於て、最早や第二義に低下する。ただ茲に考ふべきは、宗教上の作品たとへば彼の佛典、聖書、その他の禮讚、偈、祈禱等の或る個所に於て、熾烈なる、全く豊滿なる、極めて驚くべき藝術の薰香を、色彩を、香炎をこの人界より天上にまで燃え立たす場合がある。この時、作者は既に一切の愛一切の慈悲一切の智慧一切の信念を以て、眞に知らず識らずにその藝術的感興の眞正中に躍り入つたのである。而もその創造の喜びが全く純詩人の喜びである時に、讀者も全くその藝術に迷眩し、陶醉し、果てはその藝術がその當初に於ける宗教の方便品たる事も忘れて、專にただ詩の美德のみを禮拜するに至つて自らまた驚くであらう。無論こ

の時には藝術は宗教の方便品では無くなつて、その宗旨をも却つて自己の熔鑛爐に投げ込んで了つたのである。で、その藝術的價値はその藝術上の全き鑑賞眼を以て批判すべく決定せらるべきであつて決してその教旨の深淺如何に根據を置くべきで無いのである。佛畫若しくは佛像の藝術批判も、題材の尊卑に何等の因由も要しない事は論を俟つまでも無い。

かく藝術としての詩の價値はそれ自身に絶対價値を有するのであつて、その中に包含されたる思想そのものの深淺如何のみにあるので無いのである。幾度も云ふが詩に眞に必須なるものは氣品であり、香氣であり、韻律の至妙至美である。

その人その詩である。

既に前數章に亘り可なりの委細を盡した筈であるが、改めてもう一度云はう。詩はその詩人のあらゆる情念、官感、思想、知識の渾然たる圓融體である事である。かくして個性その儘の表現がなる。最も人間的な、而も亦永遠の神格にまでの無我の流通が茲より起る。かるが故にその詩の高下はその人自身の高下に由る。詩は偽るべからざるものだからである。

かうも云へる。

詩はそれ自身が美の宗教である。詩人はそれ自身が美の使徒である。此の不斷の煉獄の、此の惡、此の煩惱界、此の慘苦の人間生活に於て、詩人たる私たちの生くる道はただこの詩に奉仕するのみである事を思ふ。切に思ふ。眞に自己の救済は日々、の自己反省に成る自己の詩を以てするより外には無い、この藝術の香氣の中に。

ああ醜に美を觀、惡の中に善を、虛に實を觀る。ああ、この聖なる愛。

詩はまことに美にして聖なる寂光土の遊びであるか。ああ、

その遊びは幼子の遊び、無心の遊びであるか。否更にその心を心として深く高く無我の妙趣に遊ぶ、その神の遊びであるか。ああ、この朗朗とした、ああ、この縹々とした、ああ、この寛々とした。

ああ、日本の詩人たちよ。おん身等は會つては物のあはれを知つた。會つては風雅を知り、寂葉を知つた。凡ては現實の諸相に徹して、その生々流轉の寂光を觀秘を識り、氣を嗅ぎ、美の法音を聽いた。澄心三昧の閑寂境に聽いた。

ああ、美の最高至上なるものはまことに聖なる愛へまで進む。

金の沈黙の中に。

私は會つて書いた。ああ、雄辯は銀、沈黙は金、この金の沈黙に常住して、靜かに大自然の理法を識り、華嚴の大光明の中に閑寂の眞諦を悟る無上の神格、沈潜秘密の徳、眞實と幻法の徳、博愛と眞勇、無邪、清貧、自由創造等の諸徳、これ等を眞に體得嚴修して眞の合掌禮拜の究極に達する、そこで初めて人間としての最高最貴の相が現はれるのだ。專にこれは詩人の行ふべき道、哲人の踏むべき道、覺者の立つべき道だ。」と。

まことに詩人はその聖なる美なる最高の詩品を通じて、終に

68 は聖の絶対境にまで己れを高めねばならぬ。ああ、その圓光を戴く境地にまで。

かの基督及其の使徒、佛陀及其の弟子、ああ、彼等の圓光は思へども崇高の氣にうたれる。縹緲とした金色の髣髴光、然しながら聖なる詩人の圓光こそまた更に美にして端嚴なる。おお、その金色の光輪。おお、その微妙光。

緑の、紅の、黄の、紫の、あるは茶色の、銀の香炎光をその背に負うて、既に幾多の詩人たちがあつた。然しながらかの金の圓光を

頭上に戴く最高最貴の詩聖は古往今來極めて稀有である。然り極めて稀有である。

西に於てはダンテ、さうしてゲーテ、純真無垢のヴェルレエヌ、唐の李太白。日本の人麿、さうして芭蕉。

おお、その藝術の詩の圓光。
私は涙し、禮拜する。

北原白秋

雪に立つ竹

小田原は先月末から幾回も雪が降った。初めのは殊に
近來稀に見る大雪であつた。箱根あたりは二尺七八寸も
積つたと傳へられた。私の書齋から見た雪景も實に閑か
でよかつた。晴とも曇りともつかぬ雪後の幾日かもよか
つた。

前庭の枇杷の老木が雪のために枯れかかつた。無花果
はすつかり枯れたので切らして了つた。でももう隣の寺
の山門前には紅い椿の花が咲きだした。そのそばの榎の
木にはその實のところだけにをりふし雪がつもつてゐた。
水仙は今が盛りである。『その頃の消息より』

雪に立つ竹

聖らかな白い一面の雪、その雪にも
平らかな幅のかげりがある。
幽かな緑とも、また、紫ともつかぬ、
なんたるつめたい明りか。

竹はその雪の面に立ち、
ひとつひとつ立つ。
まつすぐなそれらの幹、
露はな間隔の透かし晝。

實にこまかな枯葉であるが、
それにも明日の芽立がある。
影する雲の藍ねすみにも
ああ、豆ほどの白金の太陽。

かうした午後にこそ閑けさはあれ、
光と影とのいい調和が、
濕つて、さうして安らかな慰めが、
おのづからな早春の息づかひが。

聖らかな白い一面の雪、その雪にも
平らかな幅のかげりがある。
雪に立つひとつひとつの竹、
それにも緑の反射がある。

雪 後

安らかな雪の明りではないか。
ようも晴れた蒼穹である。
ほう、なんといふかはいらしきだ、
あの白い綿帽子をいただいた一つ一つの墓石は。

樋の上の雀よ、あの隣の閑けさを御覽、
海近い丘のあの陽だまりに、早や、
栗も梅も雪をふかぶかとかむつたまま、
しかも耀く縁から雫してゐる。

何だかいい知らせでも来さうな気がする、
かうした眺めの朝は、
藍紫に凧ぎ沈んだ海、あの遠くに
正しい潮の調律もとのつて来た。

安らかだ、まことによう晴れた空だ。
 ほら、山鳩が来た、何の木か揺すつてゐる。
 雀よ、さあ出て揺すつたがよい、
 幽かな雪煙ゆきけりならかへつて親しい。

すべては耀きらいてる、
 よい歡よろこびにある、
 すべては單純だ、雪と光だ。――
 幼い木魚が鳴りはじめた。

雪 煙

雪のけぶりは幽かながら、
 つもればつもるほど立つ煙か、
 ああ、あの孟宗の藪のしづけさ、
 またしてもあなたこなたにしづるる、
 そことなき月の光よ、雪煙ゆきけりよ。

雪後の曇り

ひさしぶりの楽しい暇だ、
 今日^レは本でも讀まうよ。
 なにかしら親しいこの曇りに
 わたしは餅でも焼きたくなつた。

あの寒枇杷の向うの
 蜜柑山の斑^はら雪、
 聖ヶ嶽^{ひじり}はまつしろだが、
 閑^しかな濕^しつた低空^{ひくう}である。
 見てゐると、つい、近くの孟宗の上を
 弧をかいて落つる小鳥もある。
 硝子戸越しゆゑつめたいけれど、
 ぴいちくびいちく鳴く聲もする。

炭火に片手をかざしながら、
 わたしは獨ひとりを樂たのしんでゐる。
 斑まだららの雪も光りはしないが、
 何かしねずみに匂におつてゐる。

雪後の聲

鯛かまなが啼ないてる、あ、月夜の
 雪明ゆきあけりの中うち、

なんとしたことだ、あの
 時ならぬ刻みは、聲こゑ音ねは。

あまりのこの閑けさ、
遠さ、幽けさ、
あ、また金の線が弾ける。

冬至前後

枯れがれの孟宗竹に
陽はあたたつても、
耀くほどにも明らうとせず、
こまかに枝葉はそよめいても
風が出たとも思はれぬ、

水墨集

16

明るいやうでも寒むざむと暮れ、
かけるやうでも透きとほつた、
ああ、この冬至前後の日の入り、
枯れがれのあの黄色な笹の葉に
陽はあたたつても。

老莊の無爲の思想はまことに東洋人である私たちに、か
ぎりなき蒼穹の天蓋を戴かしてくれ。雲は白く、山水
はあはれに、長閑と思へばこれより長閑なものがあらう
か。私は樂しみ樂しみ詩作に耽る。

かくの如き秋の簡素を我愛す枯木一木かすかに
光る

「雲母集」

竹林の七賢

さても黄色い圓月である、
さても閑雅な竹林である。

七^な人の賢い人、風月の友、
 この幽人たちの面持^{おもて}、姿、
 その清らかさはかぎりもないが、
 あまりに世の中からかけ離れた、
 それゆゑの月の出か、
 明るい真近な光である。
 ああ、いま、せせらぐものに
 何かのたよりがきこゑさうだ。
 さてもこの良夜に
 言葉を失^なくした

ひとつひとつの^{たましひ}靈である。
 近いやうでもまた
 遠い銀と紫の世の中である。

李思訓

月は眞珠のやうに小さかつた、
 高山の蔭である故、
 金碧の畫堂も綠に見えた。
 日中の事である。
 李思訓は繪筆をとり、
 幽かに心はうちふるへた。

あまりに細緻な自然である。
 あまりに色が深過ぎる。
 悲しいものは山と水、
 遙かな點は雲に鳥。

蘭亭の遊び

清らかな蘭亭の流水であつた、
 人々は幽かに並んで坐り、
 閑かな一日の遊びに耽つてゐた。
 高山の蔭、
 竹林の前、
 つぎつぎに朱の觴は流れて行つた。

流るる凡てをながれしめ、
 淡々として遊んでゐた。
 清らかな蘭亭の流水であつた、
 人々は軽い雲と心を放つてゐた。
 幽人逸士の交りは
 氣韻そのもの、
 金の微笑そのものであつたか、
 何にしても、あの無爲の思想と
 緑茶の煙とはぼうとしてゐる。

老子

青の牛に白の車を挽かせて、
 老子は幽かに坐つてゐた。
 はてしもない旅ではある、
 無心にして無爲、
 飄々として滞らぬ心、
 函谷關へと近づいて来た。

ああ、人家が見える、
 馭者は思はず車を早めたが、
 何をいそぐぞ徐甲よと、
 老子の微笑は幽かであつた。
 相も變らぬ山と水、
 深い空には晝の星、
 道家の腫は幽かであつた。

王摩詰

常無きものは山水、
人生のすがた、
竹林の琵琶の音、
香、
禪誦、

それゆゑに王摩詰、
水墨に丹青に、
かうかうと遊んださうな、
ああさうなよ。

竹里館

その人は腰かけてゐた、薄藍いろのつめたい榻に、
 竹林の中である、泉石のそば、
 その人は琴を膝に、何やら幽かに、
 清掻してゐる。
 王摩詰ではないか、
 あの哀曲「鬱輪袍」、

多情多才のわかい日はどこへ失せたぞ。
 白いは晝の半月、
 無爲の心。
 それでも幽かに
 琴は鳴つてる。

林泉の空

林泉のそばに陶器の榻がある、
 榻はつめたくて白い、つやつやしてゐる。
 誰か来て、今にも、
 腰をかけさうな、
 来てくれぬ方がいいとも思へる。

晝間の竹には風が動いて、
 空には薄い絮雲が見える。
 あ、星がまたたいた、一つ、
 おお、あれこそ、昔の
 幼い私では無かつたか。

晩涼

織ほい金線せんを引く
 支那風の二つ星、
 また三つ星、
 庭には婆娑とした芭蕉の叢葉むらば、
 葉蔭かげの榻たたには蛙が鳴いて、
 鮮麗な今のわたしの晩涼ばんりやうです。

わたしは天文を観、
 また青い燈籠の灯ひに
 草蟲さうちゆうの圖譜ずをひろげ、
 更けては幽ゆうかな泉石の、
 魚のうごきを恐れます。
 わたしの頭巾づえんは青、
 また、その袍ほろも青、
 涼しければ涼しいなりで、
 ああ、沈々として寂さびびて了ふか。

夜雨來る

あ、あの聲は
 鶺鴒かきさきの巢を濡らしにゆくのか、
 それとも水星の淡さを
 また緑に濯すすぎにゆくのか。
 あ、雨だな、
 雨の小供だな。

木のあたま

あまりに氣ぶかい月明である。
 むくりむくりとした木のあたまの
 あまりに閑かな夜陰である。
 いつも高いところに棲んで、
 いつも梢を瞰み下さしてゐるわたしは

あの椎や榎や鉾杉の層が吸ひこむ
 この青寂びた闇と月光をおそれる、
 むくりむくりとした
 どこまでも、むくりむくりとした。

鷹

群青の濃い松葉を
 さうさうと鳴らすは風か、
 溪川のむせびか、
 ともあれ、代楮の鱗形の枝にとまつて、
 わたしの鷹は鋭く、
 天の織月を凝視めてゐる。

耀くもの

さうさうと
溪川せきせんに輝かがやくもの、
そは水かいな、
放たれたる日光の跳躍、
ああ、その無心の水浴。

虎

ああ、簡素な秋、
竹二三、
溪泉せきせんの岩に
置き忘れた張子の虎、
その黄の
耽々と首ふるかがやき。

水墨牡丹

大雅よ、あなたは水墨の牡丹花であるか、
 豊かにして、而もこの色の簡素なことは、
 むしろ禪意に近い墨の深さである。
 この閑寂な山中の真晝を
 そよそよと通る微風に咲き溢れて、
 苔蒸す岩根までも揺り動かすばかり、

あなたの牡丹は氣を専らに澄み沈んでゐる。
 凡ては老莊の無爲に住して、
 名利の外にうち寛いだ風懷の
 いかにもまた安らかに寂しく見えることぞ、
 おお、まことに暢びやかな日永の氣韻は
 點の山蜂をさへ空の一方に飛ばしてゐる。

竹
田

樂しみ樂しみあなたは畫いた、

唐風の山水を、また花鳥を、

悠悠たるその無關心、

畢竟はあなた自ら美の恍惚にひたることではない
か、

神を暢べ、氣をやすむることではないか、

樂しみ樂しみあなたは畫いた、

まことの遊びを幽かに爲た。

白菊

ちやうど菊の眞盛りである。
 童顔白髪の翁が、時をり、
 竹の籬からさしのぞくが、
 誰とて見知つた者も無し、
 おほかた、となりの
 白菊の精でもあらうぞ、
 まことに今は菊の盛りである。

童と父

今は黄菊の盛りである。
 わたしは童とあそんでゐる、
 童はわたしのかはいい子だ。
 わたしは父ゆるおもはゆい、
 童は黄菊をむしつてゐる、
 わたしはその頬をしやぶつてゐる、

おお、よい子だ、
 めづらしい澄んだ蒼空だ、
 鴨ひよまでが小ちひさく迅はやく翔はけてゐる。

詩作のとき

かうも楽しみ楽しみ
 詩作に耽ひれるわたしか、
 ちやうど菊の眞盛りである。
 眺めてゐると、
 日あたりの閑しづかな陽炎かげろうの向ふに、
 小ちひさな小供こどもが浮うんで來た。

あ、わたしだ、亂菊の
 白い明りを頭に、
 なにか食べてる。
 あ、あの蒸かしたての唐饅頭、
 それに縫れる黄色い蝶々、
 見たばかりで、もう、わたしは
 ほればれとなつてる。
 あ、あの鹽餡粉。

茶の花

茶の花の咲くのは
 秋のなかごろ、
 どの家でも障子を張りかへたあと、
 露霜がそれから細かになり、
 機動演習の軍馬が
 鍋釜までも車で挽いて逃げる慌ただしさ。

茶の花をいちりん挿しに生けて、
 坐つてゐるわたしも寂しがりだが、
 遠い百舌きちを追つかけてゆく
 村の小供も飛んだ感傷家だ。
 おつつけ雨でもふりつづいたら閑かになろ、
 それから晴れると、いよいよ、
 眞白な不二の山の遠景となる。

銀杏

銀杏は緑いろの實だ、
 白い眼の形した殻、
 あの稜をたたくと——
 わたしは思ひ出す、小さな木の槌と臺砧とを
 お河童髪さんの昔を。

銀杏は緑いろの實だ、
 火に寄せると金いろの輝きをして
 苦いほど焦げる。――
 もひとつ作らう、小さな木の槌と臺砧とを、
 また、秋風の夜を坐らう。

銀杏は緑いろの實だ。
 ひとつひとつ叩いて、
 さあ、ひとつひとつ焼かうよ、
 わたしは作つた、小さな木の槌と臺砧とを、

おお、我子よ、坐らう。

銀杏は緑いろの實だ。
 あの白い殻をたたくと。――

露

墨を磨り、
 墨を磨り、
 閑かに心を澄しながら、わたしは、
 竹の根方の水引草をながめてゐる、
 あの紅い點々の花、

その點々の一つに
 露が一つ、
 光つて、揺れる、
 いい朝。

小景

大きな桐の枯れつ葉が、たつた一枚、
 ゆらりかざりとするたびに、
 跳ねとばされたり、止まつたり、
 ちよんぼりともんどりうつ、
 小さい赤い五重の塔。

ああ、秋だ、
 何處やらで日本の笛の音がする。

南畫中の半日

ああ、この水墨をわたしはくぐらう。
 まさしく竹林の微風に逍遙ふわたしは、
 豆のやうな白い月をも瞳の外に忘れ、
 山溪の橋をわたり、
 時をり黒い馬酔木を岩壁の縁に眺め、

村里の酒舗を過ぎり、
 飄々乎として畫中の半日を遊ぶに、
 凡てはうす墨の世の中にあつて
 恬淡とし無爲の歩行を移す。
 ああ、またしても竹林は竹林につづき、
 一點二三點、雀は雀と吹かれて飛ぶ。

千利休

一

利休が茶を愛したのは
 茶の心を楽しんだのだ。
 あの朝夕の閑雅な心。
 茶よりも煙が慕はれる。

二

象を幽かに保つことは
 心を幽かに澄ますことだ。
 それゆゑ利休は坐つてゐた、
 茶室の薄陽に微笑んでゐた。

冬至

落葉は吹かるるままの落葉であつた。
 日のあたる庭石も置かれたままにかけつてゐた。
 ただ、それだけのうら安さだ。
 今年の冬至もあたたかい。

句會

日向ひなたの庭の落葉に
 陽のかげるやうな氣がする。
 今しがたまでゐた小雀こすずめも
 いつやら隣へ行つたらしい、
 寂さびしうなつたと誰かが云つた、
 どうやら句會が落ちついて來た。

翁

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休の茶における、其貫通する物は一なり。芭蕉

うちのべた一枚の金箔の裏、
墨の繪の心か、
翁こそ時雨のたましひ、
冬の日の日あたりの松。

境涯の讚

朝顔にわれは飯食ふ男かな 芭蕉

句はおのづからのもの、
境涯のもの、
松ゆるるに松の風、
椎ゆるるに椎の涼かせ。

落葉

聲するは
 落葉か、
 ああ、やぶれ障子に
 またしても日があたる、
 墨繪の枝、
 鳩のやうな雀の影よ。

枯木

陽の射線は、そのとき、
 斜ななに雲たからそそいでゐた。
 ああ、その下に、見よ、
 白金しろがねに寂さび輝く
 一本いっぴんの枯木の全身。

ああ、あの簡素、
あの整齋と細緻、
ああ、あの
寒ざむとして輝く心象。

枯野

枯れがれの竹藁草かよ、
葛の葉かよ、
日あたりへたまに出てもよ、
かがんでゐてもよ、
枯れがれの風の色かよ、短日みじかひかよ。
かうした野面の片隅かよ。

函嶺消息

温かさうなは日のあたる山、
 寒いは日かげの松、鉾杉、
 函根はなねは何かと氣せはしうて、
 落葉焚くにもゆとりがない。
 酒を藥罐でじんじとつけても、
 一杯二杯ですぐ暮れます。
 織ほそい月まで光ります。

寒山拾得

落葉掃くとして、
 箒持つ手がかちかむなら、
 はあと一息かけしやんせ、
 寒山よ、拾得よ、
 霜はふかいが天てんの霜、
 風はさむいが曉あけの風。

渡り鳥

あの影は渡り鳥、
 あの耀いかりきは雪、
 遠ければ遠いほど空は青うて、
 高ければ高いほど脈なだ立つ山よ、
 ああ、乗のり鞍くら嶽たけ、
 あの影は渡り鳥。

山 岨

劉曉と、さても幽かに、
 笛の音でも爲して來さうな野山だ、
 あ、爲して來た、牛に乗つた
 横よこ向むかきの童わらわが通る。
 例のとほりの簡朴な
 かうした畫趣も古くなつたが、

時をり、この映像はあらはれて、
 味もない岨さへの上下を明あるくする。
 それはあのほほけ薄うすと冬の日との
 寂さびしさあまつて描かく幻か。
 薏苡じゆいの枯れつくした實みまでが、
 からからと風に鳴つてる。

終日風あり

77
 枯れがれの吹かれどうしの薏苡じゆいが
 耀かがやきながらに音を立つるよ。
 わたしも見ながらひとり通るよ、
 枯れがれの吹かれどほしの薏苡じゆいが、
 耀かがやきながらに音を立つるよ。

冬
晴

冬晴のつめたさ、

柚子の黄色さ、

わたしは棹でつついてゐる、ふり仰いで、

あああの實のかはゆさ、

故郷の遠さ

——わたしは下からつついてゐる、つついてはゐる

が、

落ちよ落ちよと願ひながら、

落ちるな落ちるなとも見てゐる。

あ、小雀が啼いてるな。

鯨の來る頃

寒うなります、
 日も白く、小さく、
 しだいに遠くへ離れます、
 すると、いつかしら雪雲が出て、
 西から巽へかぶさります。
 ああ、せめては水平線にだけでも、

青い、すこしの空でも
 残してくれば有り難いが、
 あちらも何だか時化てるやうです、藍鼠に。
 | | お爺さん、舟を出しますか。
 | | おおい、出すには出さうがの、
 魚はみんな沈んで了つた、
 何にしても、今夜あたりは、
 金うるこの鯨でも來さうな沖だよ。
 漁火をほうつと燃すんだな。

短
日

新月が出てゐるなと
 わたしは硝子扉を透かして見た。
 感冒の一日はさみしかつたよ。
 めづらしい赤い夕焼のあとで、
 急にひえびえとして来た松が枝、

あの透明な薄あかりの空こそ、
 幼い昔の幻燈畫を蘇らせて、
 今またわたしを山の向うに誘はうとするのか、
 ああ、童女のほそい蛾眉が出て居る。

時雨

時雨は水墨のかりがする。

燻んだ浮世繪の裏、

金梨地の漆器の氣品もする。

わたしの感傷は時雨に追はれてゆく

遠い晩景の渡り鳥であるか、

つねに朝から透明な青空をのぞみながら、

どこへ落ちててもあまりに寒い雲の明りである。

時にはちりちりと亂れつつも、

いつのまにやら時雨の薄墨ににじんで了ふ。

蘆雁

洲のはなの吹きさらしに影して、
 かれらは四五羽の蘆雁であつた。
 かれらは養つてゐた、たまさかの陽の明りを、
 つくづく眺めてゐた、遙かな雲ぎれの青みを、
 時雨がうしろにほそく残つてゐた、
 かれらはそれにも心をひかれてゐた。

かれらは四五羽の蘆雁であつた、
 大きな、けれども白い月の出を待つ
 寒い四五羽の蘆雁であつた、
 満汐どきの、時をり啼きかはす蘆雁であつた。

雪江

雪は蘆江あしこうにつもり、
山は高く、真近まぢかに、
閑しずかなり、ただ、
真白ましろなり、ただ。

ああ、この朝あした、

薄墨うすすみの空と水とに
半輪の真珠いろの月。

消えよ、蘆雁あしかりよ、

ああ、消えよ、蘆雁あしかりよ。

王維の雪景

かのやうに山水を愛するのは、
 王維よ、あまりに世を厭ふからではないか。
 あなたが畫いた寂しい雪景、
 あの白い岩も柳も
 あまりに白い。

凡ては水墨の暗い情致の中で、
 あなたの靈はあまりに白く落ちついて、
 あまりにあなたは澄みきつてる。

山峽の良夜

なんといふ紫の

峽の良夜ぞ、

雪のつもつた竹、

林泉の石、

敗荷を閉ぢた氷の面。

鶴よ、朝から持ちつつけたこの閑けさを

少しでも、むざと、亂してくれるな。

月は宵から中天にあるが、

あの片われの半面の深さ、

光をひそめた紫の濃さ、

ああ、その縁に銀星がまたたく、

三千年の昔のまたたきが。

鶴よ、林泉の雪に黙んで

せめては仙家の秘薬を練つててくれ。

雪中の芭蕉

暗いほど深い藍紫あむむらさきの空の下に
真白ましろな雪中の芭蕉がある。

ああ、この夜明よあけを誰たれが見つけたぞ。

雪はつもるだけつもりつくして、

しんぞりとしづれようとする

この澄み明あかつた、この刹那せつなの、この聖せいなる閑ひらけさの中

で、

ああ、誰たれが情癡じやうぢの

あの艶つやめく雪の香煙かうえんを捉へようぞ。

啼なげよ、鴉あよ、

ああ、啼なげよ、鴉あよ。

雪中思慕

雪は霏々として、蒲の穂につもり、
 灰いろのへら鷺も今は姿をひそめた。
 わたしは小さな簑笠を着た童わらわ。
 この雪に日の暮に何處どこへ行つたものか、
 片手にはまだ龜の子の温あたたかみがあるのに、
 遠い母里ははの金きんのラムブも見つからぬ。
 ああ、霏々としてふる雪の郷愁ノスタルヂヤア。

雪溪の氣品

菊子よ、
 おまへは雪溪の氣品を保つてゐる。
 少くともおまへの瞳の中には
 雪にうもれた馬醉木あしびの濃青さがある。
 またせせらぐ水の音もする。

その閑かな夜明の岩上を愛して、
 時をり色彩に饑ゑたわたしの鹿が出て見えるが、
 それでも近よれぬ雪溪の氣品は
 いつでもつめたい霧けむりを立てて明る。

雪 曉

この毛糸の上衣の眞赤さ、
 髪の毛の黒い、眼の大きい童子よ、
 これがわたしの子であつたか、
 雪のふかい枇杷の木の根を
 いつだか手を引いた事があつたよ。

すべては前の世の夜明のやうで、
 ああ、今、この世でまた抱いたよ。
 その雪がふつてゐる、
 ああ、今朝もその雪がふつてゐる。

やや遅い月の出

この霜の深さに、丘の窪みゆるゑ、
 やや遅い月の出である。
 初めに先づ銚杉の尖の一つが、
 闇から金いろの縁をつけて顯はれると、
 幽かな夜陰の風の象までが、
 こむもりした、そして細かな枝葉の揺れにも浮き輝

いた。

その向うから少しづつ月が上る、
圓い、やつばし金いろの月の輪である。

わたしは子供を高くさしあげる。

小供は急に目がさめた様子で、

手足を私の頭上で跳ね躍らす。

おお、我子よ、あの月を採れ、

なんと金いろの大きな月だ、

あ、上つた、上つた、

杉の梢をすつかり離れた。

曉 闇

黎明のほの暗さに、

影の深い竹林の奥から、

微かに歩いて出て来さうな聖の

あの頭の圓い輪光、

ああ、その緑金の輪。

満月の入り

暁闇の霜に揺らるる

孟宗の上に

落ちかかる満月である。

あの凍えた山河、

わたしは寝ながらのぞいてゐる、硝子窓を透して、
なんといふ狐いろの冷たい白光。

あ、鶴の聲がする、山下の別荘の鶴だ、

群青の松ヶ枝も明けはなれる。

まだ落ちぬ満月よ、朝焼が来た、

ああ、この地球の

朱の、紫の朝焼が迫つて来た。

ある初冬の朝

冬といふのに
 新鮮な葉の濃青さ、
 その薊の花の咲いたばかりの藤紫、
 あ、蝶が来てゐる。雪のやうな
 翅を立ててはとまり、
 開いてははばたき――

107

ああ、この草土手に射す朝日を
 何と今朝も感謝しようぞ。
 その時、やあとわたしは帽子をとつた、
 (子どもを擁へてる片手で)
 向うから親しい友の一人が来た、
 わたしたちは近づいて笑つた、
 冷たいが力ある握手、――
 「お早う。」「おお、お早う。」

白虹

雪がほんのすこし、
 降りかけたかと思ふと止んだ、そのせいか、
 急に寒さがこたへて来た。
 硝子屏越しの寒枇杷よ、孟宗の秀よ、
 聖ヶ嶽はまつ白で、その真上の
 薄墨いろの雲間から、ああ、仰げよ、

末廣形にふりそそぐ午後の白虹、
 その髣髴たる射線。

わたしは筆をとりあげた、また、
 しみじみとして獨である。

寒梅餘香

玲瓏たる白い圓月である。
 この寒梅の盛りを、夜陰を、
 今しも何の聖ひじりが通られたぞ。
 ああ、満天の霜よ、水氣よ、
 ひとしきり輝いて行かれた、その
 ちやうど後うしろすがたの薫香かきよ。

潮鳴の夜

潮鳴の正しい夜頃になつた。
 わたくしは早咲きの水仙を七寶かぶらの瓶かぶらに生けて、
 輝く百燭光の電灯の下で、
 一つ一つ、四角な細字を掴みあげ、それをまた、
 方眼紙のひとこま一ひとこま小間ひとこま一ひとこま小間ひとこまに押し入れてゐる。
 あまりに全面が光り過ぎる。
 あまりに文字がはつきり爲し過ぎる。

あまりに理智に過ぎる、今夜のわたくしは、
 この精密な考察と意識とは、また、
 あまりに透き徹り過ぎる。
 水仙の葉の濃青さ、
 花の白さ、つめたさ、
 ああ、その早春の香氣さへ
 あまりに確か過ぎる。
 ましてや正しい閑かな潮鳴、
 あまりに社會は眞近に切迫爲過ぎる。

早春の夕景

書齋より

空は晴れ、
 寒枇杷の冷めたい花、
 山ぎはのはつきり明つた
 向うの斜ななめの線。

ああ、その上へ出て
 遙はるばると還かへつて来る
 飛行機の鷹ほどの影。

早春の、この透きとほつた、
 どこが爆音のきこえて
 しかも、次第次第に近づいて来る、
 何かこのひもじい夕景。

鮮麗せんれいに點つけよ、電灯でんとうよ。

我子に

115
 おお、我子よ、
 おまへを思ふと光になる、
 おまへのためには夜露よろにならう。
 わたしはおまへの砦とりで、
 涼しい軽走のヨット、
 おお、我子よ

おまへのおかげで磨かれる、
 いよいよまことの心になる。
 まことの言葉が流れ出る。
 みんなおまへのおかげだ。
 父は幸福だ。

金屏の歌

ほれぼれと眺めてゐた、わたしは
 わが書いた金屏の歌の草書を、
 いい墨いろよ、
 めづらしうよう書けたものよと、
 香かでもたいてくれぬか、
 ああ、誰たか見てくれぬかと、――

かうした今夜のありがたさよ、
泣きたいやうなわたしである。
ああ、梅もにはふぞ、にはふぞ。

初 蛙

おや、蛙かきではないか、鳴いてるのは、
おお、もう二月の新月だね、
冷つめたいやうでもはや曇曇つて、
かげつたやうでも輝きらいてる。

蛙だ、まったく、ころころ蛙だ、

一杯のんだら出て見ようよ、
水田は梅花に明つてゐる。
大白星まで映つてゐる。

江の嶋

ああ、春春その嶋には、
老木の椿が咲き盛つてゐた。
母と子とはそれを仰ぎ仰ぎ、
とある岩根に腰をおろした。
あ、鶯が啼いてる。
母上もお年よられた、

わたしももう四十に真近い。

母上は疲れたとて足をさすられ、

子のわたしも足をさすつてゐた。

「歌ができましたよ、ありがたい。」と私は云つた、

「おお、さうかん、わたしもありがたか。」

二人はうつとり見上げてゐた。

紅い椿の花に日があたつた。

虎の煙草

朝鮮では昔々といふことを虎が煙草を吸うた頃といふ
さうである。そのおほまかさ野呂問さはわたくしをして
心から哄笑せしめる。この章に收めた七篇の童謡と一篇
の民謡とにさうした愚かな、而かもわたくしの心からの
哄笑と微苦笑とを絆ひ交ぜたものである。見てもらへば
何かわたくしの他の詩興と流通するものがあらう。おな
じ人のおなじ境涯から湧き出たものだからである。

象の子

わたしや象の子おつとりくしてた。
何か知らぬがゆつくりくしてた。
お眼々ふさいでうつとりくしてた。
お鼻ふりふりゆうりくしてた。
何處か知らぬがのつそりくしてた。
いつか知らぬがとうろりくしてた。

何もしもせずぼんやりくしてた。

坊や

おまんまだよ。

誰か呼ぶけどうつとりくしてた。

お鼻ふりふりゆうらりくしてた。

片眼の象

片眼の象は

眼のある方へとお鼻を捲き上げた。

ふうらんしよふうらんしよだ。

眼のある方へとお薬をしごいた。

眼のある方から子どもを捲き上げて、

お脊へ乗つけたつけ。

片眼で笑つた。
 紅い牡丹を片眼で御覽で、
 黄色い蝶々を片眼で御覽で、
 それ坊や、そつちへ出た、
 それ坊や、こつちへ出た、
 そして、時計を片眼でふり仰いで、
 ああ、もうお午か、
 あつちの牡丹もおしまひだ。

田舎のお午

鶏頭が軍鶏におどろいて、
 軍鶏が鶏頭におどろいて。
 牝馬が牡馬におどろいて、
 牡馬が牝馬におどろいて。

犬がおどろき、
 ぼう、わう、わう、
 ぼう、わう、わう、わう、
 ぼう、わう、わう。

おおい、誰だか射たれたんだとよお、
 雉子と間違へたんだとさあ。

馬の顔

何か白いもの
 窓から出てる、
 白馬の顔だよ、
 さつきから出てる。
 裏の千町田は
 稻刈果てた、

刈れば寒いかな、
 遠いか、白馬よ、
 なせにつまんなさうに
 窓から見てる。

「なにか知んねえだが、
 俺、ぼんやり見てる、
 空のどっこかに穴があいたか、見てる。」

物臭太郎

物臭太郎が日向ぼこ
 ぬうらりくうらり温くかろな。

物臭太郎が父さまも
 どこかでぼんやり温くかろな。

物臭太郎がお母さま、
日永ひながに去られて温ぬくかろな。

物臭太郎がお祖父さま、
お墓の下でも温ぬくかろな。

物臭太郎がお祖母さま、
なむあみだぶつで温ぬくかろな。

物臭太郎が日向ぼこ、

物臭づくめで温ぬくかろな。

物臭太郎がひとりごと、
明日あしたもやつぱり温ぬくかろな。

この子あの子

民 謡

あの子もたうとう死んだそな。
 嫁取り前じやに、なんだんべ、
 蕪畑かいらはたけにや鱒いわしがはねる。
 お墓参りでもしてやろか。

この子もたうとうおつ死んだ。

嫁入り前だに、なんだんべ。

花は馬鈴薯じゃがいも、うす紫よ。
 鉦かねでも叩いて行きましょか。

どの子もどの子も、なんだんべ。
 色事いろことひとつ知んねえでな。

子芋こいももどつさり殖かえたによ、
 かはいさうだよ、まつたく、なあよ。

紅い蝶々白蝶々

紅い牡丹に紅蝶々、
白い牡丹に白蝶々。

紅い蝶々が立つたらば、
白い蝶々が立つたらば、
紅い牡丹に白蝶々、
白い牡丹に紅蝶々。

紅い蝶々が立つたらば、
白い蝶々が立つたらば、
紅い牡丹に紅蝶々、
白い牡丹に白蝶々。

紅い蝶々がまた立った、
白い蝶々がまた立った。
なんだかおっかないぞ、早う逃げる。

虎の煙草

無意味なる童謡の一つ

むかしむかしその昔、
 虎が煙草を吸うたころ、
 長白山ちやうはくざんから鷺が来て、
 岩の根もとに牡丹あかが咲いて、
 牡丹あか紅いで流れに映る。

そこへ黄色いお服の韓子かなご、
 韓子かなごほこぼこ水汲みまする。
 水は清いし、深さは深し、
 遠いお里で笛吹きまする。
 月も出まする、夜もあけまする。
 明けりや韓子かなごの影も無い、
 鷺も牡丹も影も無い。
 そこで煙草の火も消えた。
 虎がわつそり欠伸あびした。
 これでおしまひ、はい、左様なら。

芙蓉の季節

木兎の家の萱屋根に匍ひからんだ蔦がつらが細かな薄黄の花をつけ初めた。硝子戸の外は薄紅の芙蓉の盛りであるが、コスモスはまだ咲かぬ。私はおしろい花や葉鶏頭やカンナや萩や鞆鼓あざみや、唐黍や、トマトや、さうした庭を見下しながら藝術自由教育の算術の問題ばかり考へてゐる。笑つてはいけません。日本に曾つて無い藝術的な算術の本をこしらへようと、私は思つてゐるのである。藝術と科學と數理とを一つにしたさういふ問題を私は私の庭の草花や、星座や、昆蟲や、小鳥やから探し出さうとしてゐるのである。〔その頃の消息より〕

初秋の朝飯

正眼まきめに觀入みいる
白芙蓉しろふぎ。

幽かすかに聽きくは
瀬せのひびき。

秋はすすしき山水に
 時たま涵るわがこころ。

白の朝飯、
 白芙蓉。

今朝も身に染む
 水しぶき。

初秋の庭

薄紅い芙蓉の花と
 羯鼓薊の藤むらさき、
 ああ、硝子戸の陽の反射も
 もう今朝は秋。

麥稈の壁にからんだ
 蔦かづらの幽かな花、
 その影にも風が立つのか、
 何か、羽蟲が消えて、光る。

涼しさとあはれさだが、
 早や、庭にある。

このつくろはぬ薫りと撓りとは
 何處から來た。

あ、坊やが抱かれて
 コスモスの緑へ這入つてゆく。
 あ、引きもぎつてゐる、片手で、
 笑つてゐる、笑つてゐる。

初秋の空

二階の書齋より

ああ、あの瑠璃の満ち満ち
空の深さ。

ああ、この緑と薄黄との
輝く孟宗を透かして。

未だに激しい残暑の日射、
つくつくほうし、
しかもいち早い秋の微風は
揺れうごく笹のしだれを越す。

あ、揚羽が来た、黒い翅を張つて、
ひらひらと潜り抜ける。
親しい、それも殿かな
吹かるる、おのづからの姿。

季節は風と光に乗る、
 凡ては流るる、有りの儘に。
 まかせよ、さながらの薫りを、
 まかせよ、寂びと撓りと。

ああ、あの瑠璃の満ち満ち
 空の深さ。

ああ、この緑と薄黄との
 輝く孟宗を透かして。

山寺の初秋

かやの實のさ青さ、
 この繁みの木ぶかさ、
 さても、ここから透かし見る
 御燈明のすすしさ。

雨とふる残暑の
 つくつくほうしよ、
 日ざしは墓石の角から
 すでに芙蓉の苔へ移つた。

ひそやかな、それでも
 深い悲しみとて無い秋、
 山のお寺は農家めいても
 さすがに濕つたいい薫りだ。

あ、女の子が出て来た、
 お化粧をして、澄まして。
 また葬ひでも待つのか、
 おしろひ花でも摘むのか。

庭の一部

さあ、朝飯だ。
 眞紅な、ちらちらする、
 コスモスの花が三つと、
 穂の出たばかりの小さい唐黍、
 なんとこの庭の一部の
 幽かな、新鮮な秋。
 あ、郵便が来た。

葉鶏頭

黄の紅のとりどりなる
 葉鶏頭はあはれよ、
 ああ、日に夜に伸びきそへば、
 つつましくも伸びそろへば、
 今は人の脊丈にもとどきなん。
 葉鶏頭は透きとほるよ、

秋づけば秀末まづ燃え、
 下葉また燃え、
 皆つぎつぎに揺れかがやきぬ。

初秋の夜

月は十六夜、
 ほんの缺け初め、
 稻妻だ、幽かな。

滯れて光るわづかの星、

ああ、そして一面の蟲の音、
 初秋の露。
 稻妻だ、幽かな。

綿雲のうす紫。
 稻妻だ、幽かな。

絶えずまたとどろく海、
 嵐の名残。

稻妻だ、幽かな。

月はいよいよ澄み、
 揺れそよぐ斜丘の小竹、
 稻妻だ、幽かな。

夜の二時

書齋の露臺より

ああ、山

電柱の灯ひが一つ、

パツと燃ゆる赤、カンナだ。

そのほかは蟲の音、

聞、聞、聞、

藁小舎の木ま兎うの家。

あ、ほととぎす。

緑の黎明

私は屋根裏へ上つて毎晩星の研究ばかりしてゐた。實に赤く光る火星だ。あの燦爛とした南天を仰いでゐるほど氣持のよいことは無かつた。小田原も祭や花火が濟んだ。やがて盛んな土用波の時節が來るであらう。あの波濤の雄大さを私はまた見に出る事を樂しむ。それに庭はもうコスモスの花盛りである。『その頃の消息より』

雨の樋

童謡

105
とんとと鳴らせよ、雨の樋、
坊やがねんねの枕もと。

とんとと鳴らして、また明けりや、
 二重のお虹も屋根の上。
 とんとと鳴らせよ、雨の樋、
 坊やがお目ざの枕もと。
 とんとと鳴らせよ。
 とんとと鳴らせよ。

緑の黎明

白い木槿の季節が来たね、さうして
 孟宗の緑の夜明が。
 おや、この霧雨のどこかで
 鶯が啼いてる。いや、あれは氣早な
 百舌の口真似だ。
 茶でもお入れ、それから

すぐ朝飯だ。
 見ないか、あの廂ひましの
 ひとつひとつの雨垂あまを、光を。
 まるで眞珠だ。揺れてる。
 あ、蝸牛カタツムリだ、あのいちばん大きな雫は。
 あ、蝸牛カタツムリの雨垂あまだ。
 そら、こぼれた。また凝こもった。光った。
 いい緑だ、いい緑だ。

雀よ

おお、雀よ、
 目がさめたね、
 雨があがつたね、
 木き権けんが白う咲はくきだしたね、
 涼すずしい空そらだね、
 朝あさ涼すずだね、

おお、雀よ、
飛んでいい、飛んでいい。

朝

よかつたな、雨が霽れて、
涼しいな、
朝のお茶もいいものだな、
ほう、小さな栗の毬まだな、
まだ青いね、
おや、ありやさいかち蟲むしだね、

もうきちまきちやつてるぞ、
 ほう、墓石に陽が射したね、
 ほう、緑だ、
 すばらしい緑だ、
 おい、菊子、菊子、
 飯だ、飯だ。

朝めしの時

つつましい妻、
 つつましいコスモスの葉、
 つつましい朝めし、
 つつましい二言三言。

翔かけて來て、ちりり、
小竹ささに來て、りりり。
雨脚あましのや迅はやい、
陽ひは淺みどり、
ちりり、
りりり。

雨上り

ちりり、
りりり、
巢立ちの小鳥、
一羽、二羽、
三羽、四羽、

ほつとカンナが、あ、
 空気ランプを点けました。
 雨もみどりににじみます。
 げっげっげっげっ。

浅宵

とても薫りが湿ります。
 蟾蜍の小父さん、
 藪は茗荷でいつばいです。
 月が細かいか、

祭のまへ

祭が來るのか、いよいよ、
さうだ、もうそのじせつだ。
祭と云へば楽しかつたよ。
したが、もう、過ぎた昔だ。

竹たけ蕒たき草くさよ、
白しろ芥わい子しよ、
ほのかな月夜に煙つてくれ、
わたしの祭は過ぎて了つた。

遠い田圃の
ころころ蛙かはづ、
あ、竹を伐つて
笛を吹くのは誰だ、
そんなに待ち遠しいのか、祭が。

島よ、岬よ、

またあの燈あかりを

ちらちらさすのか。

ああ、また囃はし子こをつづけるのか。

胸むねさわぎよ、

白芥子よ、

せめては月夜に煙つてくれ。

わつしよわつしよも昔の夢だ、

遠い遠い昨日きのうの夢だ。

幽おとかな幽おとかな太鼓の音だ。

祭

民 謡 體

遠い、何處かで祭ちやさうな。

おお、坊やよ、

どこか、月夜の囃子ちやさうなよ、

わかいむすめの、ヤレ、宵祭。

遠い、何處かで祭ちやさうな。

おお、坊やよ、

いまにおまへの祭も來ましょよ。

せめてそれでも、ヤレ、待ちましょか。

遠い、何處かで祭ちやさうな。

おお、坊やよ、

わたしやお父さん、昨日の祭よ。

遠いお笛の、ヤレ、影祭。

祭のあと

祭が過ぎた、こほろぎ、

もうおまへの夜ばかりだ。

甜瓜メロンでもかぢらうよ、甜瓜メロンも

それとて杏仁水アンズのかをりがする。

祭が過ぎた、あのぞめきも

もう遠い岬へ移つて了つた。

葉巻でも喫すはうか、いやいや、

それとてけふ日は舌も荒れたよ。

祭が過ぎた、あれから、

めつきり風まで冴さえて寂さびた。

今さら、思ふと名残惜しいが、

それとてやつばし他の祭だ。

祭が過ぎた、こほろぎ、

もうおまへの夜ばかりだ。

夜空はいよいよ深うなつたが、

宵から黄色い月の入りです。

祭が過ぎた、たうとう、

山から聴いてて過ぎて了つた。

花火も濱から揚つたやうだが、

それさへおちおち見ずに了つた。

ある宵の童心

松風を松風と氣がついた時、

わたしは甜瓜をしゃぶつてゐた。

おとなしい里の蛙よ、

月の萌黄よ、

わたしは幼いわたしに還つてゐた。

お母さん、お母さん。

鶉

童 話

坊やよ、鶉が啼いてゐた。
粟穂の粟穂の畔の奥。

月夜は遠いと啼いてゐた。
見えても遠いと啼いてゐた。

夏 野

目にとめて幽かなものは
野菊の花、

竹莢草のすがれた花穂。

この激しい日でりに

わたしは帽子も忘れて来た。

草蟬よ、ちいぢい蟬よ、
 浪の音ではないか、
 あの倦るい線返しは。
 このひもじい日ざしに
 わたしは煙草も忘れて来た。
 目にとめて幽かなものは
 野菊の花、
 竹莢草のすがれた花穂。

かなかな

啼くな、かなかな。
 啼けば遙かが暮れ易い。

啼くな、かなかな、
 小竹の入日が薄れます。

蜂の子

もとは緑の蜂の巢に
 しあはせばかりが響いてゐた。
 それがあまりにせつなくて、
 「さよなら、蜂の巢。」

いまはうつろの蜂の巢に
 なげきばかりがこもつてゐる。
 月の夜ごろはいいこゑで、
 「さよなら、蜂の巢。」

月光微韻

此乃...
...

自然觀照の深さとその幽けさとの奥にひそみて、かの
消なば消ぬかの月の光を、いな、月のにほひを、その象
をさへもとらへむとする幽かなる人々にのみ、このほの
かなる短唱のかすかすをおくる。形のはれに短かくほ
のかなるは心の幽かなるに由る。こは歌にも俳句にもあ
らず、詩より入りてさらに幽けく凝れるのみ。

月光微韻

1 短唱 二十二章

月の夜の
羅漢柏の
なんとなき
春の幽けさ。

2

月の夜の
煙草のけむり
匂のみ
紫なる。

3

星よりも
ほのかなものは
みどり兒のほほえみ、
ついたり二三日の月。

4

露けきは月の夜にして、
竹の根の
竹たけ蕒くま草の葉。

5

月の夜に
影するものの真近さ、
花ちり方の椎の木。

人聲の
近づきて、
明るか、
月の野いよ茨も

6

月の夜の
白い白い木槿に
影さすものは
笹の葉。

7

月の夜に
筆するもの、
霏れやらぬ椎の狹霧。

9

そよかせにも
小竹のゆるるか、ゆるるか、
月の夜の雀よ。

8

10

月照る野路の明さにて、
など啼きやまぬ、
鶉よ。

11

蝶の飛ぶ
水田明り、
その末は
月の夜の海。

ありありと
現はるる風、
夜のふけの孟宗の月。

月の夜の
星の淡さ、
見え来る聲の
幼なさ。

月の夜の
見えの薄さ、
風の吹く道、
星の間あひだの線せん。

月の夜の千鳥
見えて啼けとの。

月のあなたの漣、
夜ふけて、
わたる人あり。

月の夜の
薄翹か
げろふ、
白芥子の
空に舞へよ。

頼むは明日あしたの星、
にほへよ月の椎の木。

19

月かげすらも
痛いたからむ、
明日あしたひらく紅あかき蓮はらの
蕾つぼみの尖すみよ。

18

月夜の櫃、
かやの實が青うつくかよ。

21

木の花の
ほのかなる、
梢のみ
月に光らせて。

20

動き来るもの

22

「月に開く窓」吊詩

風高し、あはれ、
影無うして、月に開ける窓。

朝

春近くなんぬるか、
萬づ角ぐむ緑に、
今朝早う噫びて、

神機の動く。静寂きはまりて来る。静深うして後、動
いよいよ強し。据わらば金剛不壞なるべし。此の据わり
あり、初めて生生潑潑の氣韻成らむ。東洋藝術の根本は
此の精神の不動にあり。
古池や蛙飛び込む水の音 芭蕉

一つ啼き、
 二つ啼き、
 啼き出づるものあり。
 今朝早う堰かかれて、
 満ち、溢るるものあり、
 霧深く立ちこめし野川に、
 今朝早う目ざめて、
 羽ばたき起さるものあり。
 今朝まだし暗きに
 飛び立ち、光るものあり。

遠きもの
 まづ揺れて、
 つぎつぎに、
 目に揺れて、

一 風

揺れ来るもの、
風なりと思ふ間もなし、
我いよよ揺られはじめぬ。

二

風吹けば風吹くがまま、
我はただ揺られ揺られつ。
揺られつつ、その風をまた、
わがうしろ遙かにおくる。

三

吹く風に揺れそよぐもの、
目に満ちて、
翔る鳥、
ただ一羽、
弧は描けど、
揺れ揺れて、
まだ、空の中。

四

吹く風の道に、
 驚きやまぬものあり、
 光り、また、暗みて、
 をりふし強く、急に強く、
 光り、また、暗む、――
 すべて秋、今は秋。

五

輝けど、
 そは遠し。
 尾花吹く風。

書

人の身のあはれさ、
 我なるものさびしさ。
 つくづくと見つつゐれば、
 照り満つる海の面を
 小舟ゐてひとつ走り來、
 旗ひとつ立てて走り來、

その舟はややに進みて、
 鐘杉の梢にかかれり。
 すぐにまた杉を離れて
 かがやかに揺れ進みゆく。
 かがやかに揺れ進みつつ、
 また暗き松にかかれり。
 と、見れば、
 ふと起るモオタアの響。――
 我が外の眼路のあはれさ、
 見つつゐる我のさびしさ。

その舟は松にかくれて、
また遂に影も見せず、
ああ、あはれ、午、
朗らかなる空と海とに
まだ響くモオタアの、その音ばかり。

寒竹の

寒竹の 一つ一つに
沁みて 光る風あり、
風あり。

雀

いや高く、
 さむざむと、まだ、
 揺れのこる孟宗の秀はの、
 あはれ、その秀はに、
 留とまりもあへぬ雀の、

一羽雀の、
 揺られては、ち、ち、
 吹かれては、ち、ち、
 いづれは散りゆく日あしの
 今は冬——すぐに雨なり。

鶺鴒 鶺鴒

山川のたぎつ瀬の、
 瀬の、瀬の岩に
 ある鳥の、
 尾を振る鳥の、
 鶺鴒の、
 ふと、その岩を飛び去んぬ。

山川のたぎつ瀬の、
 瀬の、瀬の岩に
 ある鳥の、
 尾を振る鳥の、
 鶺鴒の、
 まだあるやうで、寒い冬の陽。

葛の枯葉

葛の枯葉に
日はあつても、
鴨が、ちいびい啼くせいか、
何か、遠くで時雨れます。

岩に龍膽、松蟲草、
咲いたばかりで凍えます。
鴨が、ちいびい啼くせいか、
またも雲が走ります。

蘇 枋

陽の目の遠い林に
 蘇枋の木が枯れてる。
 藤むらさきの實ばかり、
 ちらちら、宙に透いてる。
 今朝のつめたい霰に
 ちらちら、濡れて透いてる。
 あの實を食べよ、懸巢鳥よ。

薄 陽

枯れ枯れ動く蘇枋に
 藤むらさきの實の透き、
 たまさか電の飛ぶ冬、
 冬は薄し、つめたし、
 岩より岩へ陽の退く。

栗鼠の群

函根強羅公園

栗鼠よ、啼け、
競つて啼け、
雲が雹に變るぞ、
雹が岩をたたくぞ。

初冬の星

眞實の相を眞實に觀む。その相のたましひを、その命を觀む。ただ愛と睿智とは晝閑けし初冬の星の光さへもその眼にその神に捉へ得て更に幽かに澄みわたらむとす。草に草を觀、石に石を觀る。此の心はやがておのれと通する山水の、彌が上にも窮りなき同じ流れの命をも識るに到つて光らむ。觀るものの一つ一つの忝さ。讀者よ。かくして我が此等の短章は成れり。

初冬の空

大山

248
わが見る空をかざりて、
するどに尖る山あり。
つめたき冬は、かへつて
その秀はのうらに澄みたり。

丹澤山

丹澤山のあなたに
 澄みつつ青き空あり。
 つづきて目に見ぬ空あり。
 つづきて遠き空あり。

冷めたき

冷めたき空の高處に
 幽かに満つるものあり。
 つくづく見れば閑けつつ、
 晝なほ光る星あり。

篠原

やや薄黄ばむ小篠に
陽のあるほどのけざむさ。
見つつし行けば明るく、
かへり見すれば風あり。

冬の裏山

やどり木

あらはに透いて牙ゆるは
高いけやきのやどり木、
丹澤山の北風。

櫟原

薄い日ざしに明るは
山でかやの實、
蘇枋の實、
くぬぎ林のくぬぎの實、
栗の根元のおち栗。

薄日

岩から岩へとかげる陽、
しばし薄に、留まりて、
高く吹かるるさびしさ、
寒くかがやくさびしさ。

松が根

ひと時か明る松が根、
その根にそよぐ穂ほ薄うす、
通りすがりに見上げて、
山坂のぼる、日の入り。

山みちに

山みちに
目につく花は松まつ蟲むし草くさ、
冬の日の入り、松蟲草。

岩

日の照る岩のけざむさ。
草木瓜の赤さ。

弦月三章

初夜過ぎて

初夜過ぎて出づる月に
影さすものは時雨か、
はらはらと音立てて、
ふりゆく後のあかるさ。

さむざむと

さむざむと渡るもの、
 時雨、鴨、山松の風、
 遠々に落つる月、
 君をのがるるわがこころ。

小夜ふけて

小夜ふけて、松かせに
 驚くこゑは千鳥か、
 月ほそし、松が枝の下、
 松が枝の松の葉の濃さ。

秋色二章

みそさざい

松の根方にはたすすき、
松の下枝に、みそさざい、
赤く色づく蔦かづら、
風は秋かせ、みそさざい。

もみち

もみちの枝に鶴がゐて、
松には松雀二羽三羽、
どちら向いても秋の風、
どちら向いても秋の山。

返り花

もう冬來るのに返り花
紫あやめが橋のそば、
酒れ酒れお池のいしたたき
いつまでチヨツチヨと尾をたたく。

焚火

一

落葉焚けばおもしろ、
櫟くわきの葉はふすふす。
萱の葉はちよろちよろ、
松の枯葉はばちばち。

二

ひとりで焚く落葉を
ひとりで嗅げばおもしろ、
山のにほひがする、
あの頃のにほひがする。

三

落葉焚き焚き、

ひとり遊ぶころの
何か果敢はなくなりけり。
もひとつ強く燃もさうよ。

四

くぬぎの燃ゆるにほひは
くぬぎの枯れし香ぞする。
ただそれだけの事さへ、
うれしや、冬はさみしや。

五

落葉焚き焚き、
 ただ遠々と見てゐつ。
 赤い女松のまばらに、
 をりふし明る日あたり。

八

落葉焚くかたへに

見つけてふともうれしや、
 龍膽が蓄んでゐる。
 二つづつふくらんでゐる。

九

萱がよう燃えるわ、
 あたたかいぞ、あたたかいぞ、
 と、云うては見れど、やつぱりさみしい。
 黙つてばかりゐずとも、何か云へ、お前も。

落葉松

かやの實

かやの木に
かやの實の生^なり、
かやの實は熟^{じやく}れて落ちたり。
かやの實を拾はな。

落葉松について

落葉松の幽かなる、その風のこまかにさびしく物あはれなる、ただ心より心へと傳ふべし。また知らむ。その風はそのささやきは、また我が心の心のささやきなるを、讀者よ、これらは聲に出して歌ふべききはのものにあらず、ただ韻を韻とし、句を句とせよ。

落葉松

一

267

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

二

からまつの林を出でて、
 からまつの林に入りぬ。
 からまつの林に入りて、
 また細く道はつづけり。

三

からまつの林の奥も

四

わが通る道はありけり。
 霧雨きりのかかる道なり。
 山風のかよふ道なり。

からまつの林の道は
 われのみか、ひともかよひぬ。
 ほそぼそと通ふ道なり。
 さびさびといそぐ道なり。

五

からまつの林を過ぎて、
ゆるしらす歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり、
からまつとささやきにけり。

六

からまつの林を出でて、

七

浅間あま嶺ねにけぶり立つ見つ。
浅間あま嶺ねにけぶり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに。

からまつの林の雨は
さびしけといよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつの濡るるのみなる。

八

世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山川に山がはの音、
からまつにからまつのかせ。

寂心

一

かぎりなきものを欲^ほりして、
かぎりなきさびしさに來つ。
かぎりなきものと知りつつ、
かぎりなくなみだながる。

二

さびしさに常はすまひて、
ただせめてさびしがれども、
ほとほとにいまは堪へえね、
百日紅あかく咲きたり。

三

日のうちは野ゆき山ゆき、

朝を思ひ夕を思へと
かのはせをようぞ宣らしき、
朝を思ひ夕を思はむ。

四

草臥れて宿かる頃や藤の花芭蕉

日のうちはあるきあるきて、
やうやうに草臥れにけり。
せめてただ今宵の宿に、
われとわが足をさすらむ。

ふる雨の

一

ふる雨のひとつひとつも
 こまかには観る人ぞなき。
 ひとすぢの雨はひとつぶ、
 松の葉に玉とむすぶを。

二

ふる雨の音に堪へつつ、
 おもしろと聴くきはぞよき。
 松の葉にふりてかかるを、
 椎の葉に濡れてかかるを。

啼く蟲の

一

啼く蟲の中のひとつを
 こまかには聴く人ぞなき。
 一つ葉にひとつ鈴蟲、
 鈴鳴らし澄みてこもるを。

二

一つ啼く蟲のありけり、
 また一つ啼きてありけり。
 寄り寄りてさびしむらしき、
 草の葉も露もつらしき。

三

二つ啼く蟲の音色の
 いよいよに聲迫りけり。
 今や今角かど合あすらむ、
 露明りこぼるるらしき。

露

草の葉に揺れある露の
 落ちんとし、いまだ落ちぬを、
 落ちよとし、見つつ待ちあて、
 落ちにけり。驚きにけり。

麵麩と蕎麥

麴麴と薔薇

キリストはパンのかけらを、
なかばたべ、なかばあたへき。

飛び越せ、飛び越せ、薔薇の花、
子どもよ子どもよ、薔薇の花。

「真珠抄」

コーランのおしへにはいふ、
 そのなかばいちにもてゆき、
 かのあかきばらにかへよと。
 かみごころキリストにあれ、
 あくまでもひとはひとなる。
 あかきばら、おお、そのばらぞ、
 あざやけきわがどちがうた。

ほだかみ

きよらけきいよよきよけく、
 けがれたるけがれつくせよ。
 うれしくばうたひこをどり、
 かなしくばなきいざつまで。

かみのごと、わらははべのごと、
 けだものうゑわめくごと。

みもたまもほれてあそべよ、
 なにごともおのづからなれ。

しかるのち、いきはかるしよ、
 なれがいのちなれがものなる。

ある時

わらははべとあそびさわげど、
 ころからあそびほれえす。

あまつそらしじにあふげど、
 かみどころはかりしらね。

おもほへばなみだのみなる、
ただかうべくだるのみなる。

涙

おのれはぢふしてなげけば、
みをあげてなみだなりけれ。

このなみだ、なみだばかりぞ、
ただひとつ、ああ、まことなり。

棗の花の

棗なつめの花の咲くところ、
 光は強く、陽ひは青し。
 棗なつめの下もとに啼なく蛙かはづ。
 蛙かはづと呼ばひ恍惚まぼろしれ遊ぶ。
 棗なつめよそよげ、青空に。

こども

こどもがないてる、こどもが、
 こゑあげてないてる。
 どうしたどうした、こどもよ、
 わたしはあたまをさすつてやる。
 それでもないてる、こどもが、

いつまでもないてる。
 どうしていいか、こどもよ、
 わたしもなみだながれる。

白芥子の

白芥子の蕾を裂きて、
 驚きて叫ぶ童よ、
 その花の白し白しと、
 驚けよ、鮮やかにまた。

あそび 其の一

憂き我なまびしがらせよ閑古鳥 芭蕉

一

あそびこそ尊とかりけれ。
まことよく恍惚あそぶもの

神ぞただ嘉したまはむ。
まことにはあそぶ人なき。

二

身をあげてあそぶ童は
ひたむきに天もわすれぬ、
聲あげて恍惚あそびぬ。
その聲ぞ神のものなる。

三

いと高きところにあそぶ、
 そのどよみ天あまにいたらむ。
 あそびこそ尊たかとかりけれ、
 よく遊べ、みほとけのごと。

四

かうかうと遊ぶところを

まことには知る人ぞなき。
 童わらわのみ神のものなる。
 神こそは童わらわなるらめ。

五

御佛のとはあそびは
 ほとほとに盡つくくる期きぞなき。
 さるからにかなしかるらむ、
 ほとほとに堪へもかぬらむ。

六

せめてただ、さみしく、高く、
 われはただ遊びほけてむ。
 遊びほけ、遊びわすれむ、
 淫^ニ榮^マのその真^マ澄^マまで。

あそび 其の二

一

時として遊び得ずけり。
 ただただにくるしかりけり。
 さはあれど、また遊ぶなり。
 ほれぼれとただ遊ぶなり。

二

發電機ダイナモの恍ぼれしうなりも
うつつなく遊あそべばぞよき。
いみじくも妙たなるしらべ、
命いのちとる問まさへ歌へり。

三

唐黍たうの紅あかき垂毛たれげに

雀すずめらも恍ぼれてあそびぬ。
そよかせの吹ふけば吹ふかれて、
ちちとまたひるがへるなる。

四

貧ひしくてかつゑし時も
貧ひしさと我われはあそびき。
米こめなくてはかなき時も
雀すずめ子こと恍ぼれて遊あそびき

五

遊びつつ、まことあそべよ、
 身も靈たまもあげて忘れよ。
 遊びほれ、あそぶことすら、
 はてはただ忘れわすれよ。

六

あさはかにあそぶ人あり。

七

いやしけくあそぶ人あり。
 遊びつつ物欲ほりにけり。
 遊びつつあそばざりけり。

生けらくは生きてあそばむ、
 さびしくばさびしがるまで。
 常なきを常なしとせむ。
 美しきうつくしとせむ。

童
ら
は

童らは偽らずけり。

我いよよ偽りにけり。

笑ひつつ笑ひ得ずけり。

泣きつつし泣きあへずけり。

わ
が
う
た

一

わがうたのふかきところは

ほとほとに知る人ぞなき。

晝見えぬ星といふとも

つくづくと見れば光るを。

ほとほとに知る人ぞなき。
ゆきすりの息のあふれも
さむき日は白うこごるを。

二

わがうたのふかきいのちは
ほとほとに知る人ぞなき。
苦つたふしづくなりとて
つくづくと見れば滴るを。

三

わがうたのふかきなげきは

おろかしく

おろかしく涙ながせば
 おもしろと手うちはやしぬ。
 堪へかぬるふかきといきは
 人知らず、見て過ぎにけり。

孤 獨

一

ほとほとに堪へは得ぬとも、
 せめてただひとり住ままし。
 ひとりこそ安けかりけれ。
 とは云へど、目も枯れにけり。

ひとりなり、ひとりなりけり。
 誰ありて行くひとぞなき。
 日も^た閑けて道は遠きを、
 風吹けば木の葉さわぐを。

つつましきけしきの底に

つつましきけしきの底に
 いとふかきなげきこそ住め、
 静ごころ静かに堪へて、
 身のなげき思ひおこせよ。

とりどりに

とりどりにあはれとも見め、
 椎は椎、かやはかやの木
 椿なら花は紅あかかる。

こころ急せく人に

一

こころ急せき草は刈刈らずも
 時來ときなばおのづと枯かれむ。
 山人も冬を待つなり、
 おのづから枯かるる待つなり。

二

こころ急^せき追ひは越さずも
道行くにさはりはあらず、
わがさきに行く影もよし、
わがあとに見え來るもよし。

三

わがほかに行く影もよし、
草の庵ならぶるもよし、
おのづから霜もいたるを、
松風も高うわたるを。

木の馬

蒼空のはろばろしさも
 木の馬は目にし見る無し。
 草わかば萌えに萌ゆとも
 木の馬は跳ぬるすべなし。
 こぬか雨ただにしめれば
 木の耳が濡るるばかりぞ、
 ただすこしかゆきばかりぞ。

螢

螢ひとつ叩き落しき。
 その螢地に光りき。
 こまごまと二つ光りき。
 光り、光りき。

餓ゑたるもの

物戀ものこほふる掌てのひらの上へに
 こ こんと雪はふるなり。
 その雪を乞食なめけり。
 こんこんと雪は降るなり。

寢 姿

くれなるの蓮はらすの花を
 月の夜に見るがごとけむ。
 常なしと常には見せて、
 ほのぼのと我もねむりぬ。

すずしさ

一

かぎりなき花といふとも
 すずしさは野に満ち満ちぬ。
 一きれの青き漬菜も
 我が噛めば身も冷えにけり。

二

蟬の子の翅はのひびきも
 さびしさは地に染み染みぬ。
 一きれの紅き生薑も
 わが噛めば身も牙えにけり。

にぎりめし

童 謡

坊やよ、お縁えんで食たべてると、
 田圃たんぼが見晴みはらし、よい眺ながめ、
 白しろいはおにぎり、白しろまんま、
 紅あかいはお庭にわの百日紅、
 ちらちら映うつるで紅あかまんま。

お米の七粒

童 謡

坊やよ、おききよ、おぼえとき、
 父ちちさん貧ひんしいその時は、
 お米こめが七粒ななつぶ、錢ぜには無い、
 一羽ひとつばの雀すずめに粒つぶ一つ、
 七羽ななつばの雀すずめに粒つぶ七つ、
 雀すずめは啼なき啼なき食たべてゐた。
 父ちちさん泣なき泣なき遊あそんでた。

フランスス上人と雀

童話

かはいい雀が申すには
 上人さまは、フランススさまは、
 なんとうれしい、ありがたい、
 お掌て々に載つても、のう雀、
 お頭くぶに載つても、のう雀、

雀、雀とおやさしい。
 茅花かが咲いても、のう雀、
 露がちつても、のう雀、
 雀、雀とお呼びなる。

ぐるぐる廻り

童 論

いかに聖フランシスはフラテ・マツセオをしてあまたたびぐる
 ぐると回らしめ、しかしてそののちシエナに赴きしか。(聖フ
 ランシスの小なき花)

旅のお二人、ある日のことよ、
 上人さまはフランシス、
 フラテ・マツセオ、その御弟子、
 道は三筋の岐れ道、

一つはフィレンゼ、
 一つはシエナ、
 一つはアレツゾ、
 「父よ、どちらへまゐりましたよ、」
 「ぐるぐるお廻り、そら、ここで、
 神さままかせよ、みなまかせ。」
 廻りはじめた、ぐるぐるぐる。
 ぐるぐる廻りの目がまはり、
 フラテ・マツセオふらふら、

それでも止まれとおつしやらぬ。

フラテ・マツセオ獨樂のよだ、

ぐるぐるぐるぐる、上人さまませ。

「止まれ、うごくな、

さて、どつち向いた。」

「父よ、シエナに。」

「さうかさうか、シエナへさあまゐる。」

フランシスさま、御上人、

フラテ・マツセオ、その御弟子、

空には神さま、神ませ。

アントニオ上人と魚たち

童 話

今日はお説教、よい日和、

小さな魚たち岸の方、

中ほどの魚、そのうしろ、

大きい魚たち、そのすつとうしろ。

岸から海まで、みんなばくばく並んだ。

初冬短曲抄

上人さまよ、上人さまよ、

アントニオさま、お救ひ主よ、

空は青空、海は風、

なんとお面かほのうららかなさ、

なんとお聲のおやさしさ。

自然の寂び、愁人の寂び、その心を心として、假りに
妻を小唄に變へたる、ありのすさびの試みのみ。三味の
手の遊びにも、おなじ寂びしきためいきのあながちなら
ぬ慶ましさを知りたまふべし。歌と小唄の優り劣りを見
たまへと云ふにはあらず。

初冬短曲

かやに

かやにかやの實、
椎にしひ、

ええ、さて、どんぐりの木にはどんぐり
てもさても、どんぐりの木にはどんぐり。

色の黄なのは

色の黄きなのは女ま郎な花はな、
 さて、しろいのは男おとこ郎な花はな、

ええ、それ、さりとは誰たがきめた、
 ええ、それ、さりとは何時たきめた、
 しょんがへ。

けやき

榊りやきひよろひよろ、

ばらばら、くぬぎ、

山はからから、冬のかせ。

ええ、それ、山はからから、冬のかせ。

萱
は

萱は枯れても
陽はかげつても
せめて、龍膽の花なりと、
ええ、それ、せめて龍膽の花なりと。

薄
は

薄うすは薄うす
蘆あしは蘆あし

冬の風なりや音も立てましよ。
ええ、それ、冬の風なりや音も立てましよ。

松の生木で

松の生木で、生木で、
そぎつばなしたおもちやの子雉子、
風の吹く日は、
父者戀しや、
母者戀しや。

からまつは

からまつは、
風も無いのに、
つい、ほろり、
ほろり、はらはら、
風も無いのに、ほろり、はらはら、おもしろや。

どんぐりの秋

かやの實ひろひ

かやの實拾ひに行きやせぬか、
いえいえ、そちらは栗山や。

栗の實落しに行きやせぬか、
いえいえ、そちらはかや山や。

どんぐりばかり

あら、まあ、どうしたことかいな、
どんぐりばかり拾よつて。

どんぐりばかりある山や、

薄陽の旅

344

どんぐりばかり拾^ひうたて、
ちともをかしかあらへんが。

へえ、まあさうしたとかいな。

冬の薄陽に旅ゆく者の心ほそさよ。かの野山の木立の
そよぎを身にしめて、おのづと成りしこれらの詩は、い
ささか民謡の風情を帯びたれども、こは民謡のそれと云
ふにもあらず、ただわが心を野山の言葉に移して、ひと
り密かに旅のときを洩らしたるのみ。心はわがひとり
の心なり、歌俳諧の心なり。

蒲の穂やたまさか遠き薄日射

桑の薄陽

上州富岡郊外

1

347

桑の枯葉に
夕陽が弱る。

急せきやれ、遠とほ百舌もず。
冬ふゆの百舌もず。

2

薄うす陽ひ、桑か畑はた、
何どこ處こまで行くぞ、
冬ふゆはからから
空かぐるま。

3

桑かの枯か葉はが
また音ね立たてる、
遠とほい薄うす陽ひが
また明ある。

4

土ど手てのさいかち

遠い山脈
早や雪つけた。
霜の枯桑、
陽も落ちた。

雲か、風か、
飛べよ、薄陽の
みそさざい。

雲の影見て
夕汽車待てば、
何處か寒かせ、
旅のかせ。

笹の葉明り

上州富岡某氏別荘

1

よそのお庭の
笹の葉明り、
までも、ちらちら、身に添はぬ。

2

旅の日暮は
ひもじいものよ、
笹の葉すれも、よその笹。

3

寂しがりましよ、
笹の葉明り、
馴れぬほどこそ身も憂けれ。

時雨日和

1

紅葉はらはら、
山かげ、日かげ、

何の鳥かよ、
きよきよと鳴く。

2

水の音聴きや、
わびしうて、寒むて、
紅葉照る坂、
またのぼる。

3

誰か通るか、
向うの山に
こなた行く影
また映る。

4

誰か
かゝるやるか、

5

唐黍がらか、
背戸にからから、
冬のかせ。

風のさいかち、
半は枯れて、
荻が鳴ります、
日の暮は。

黍あかの赤あかい毛けを
見みながら食たべて、
旅たびの朝あさ飯いひ、
朝あさとろろ。

2

小
諸

1

城しろの日ひ蔭かげの
唐から黍あか風かぜが、
紅あかい垂たり毛けを
また見みせる。

島の山中

一

亞米利加松吹く日中の風は
幽幽かなりやこそ、
目がさめた。

二

羊齒の深みに葉づたふ露の
細細かなりやこそ、
日も闌闌けた。

郷愁

小笠原島

月の夜ぶかに
空飛ぶものは
夢の影鳥、
秋の聲。

鳥の日永が

1

ねんね、ほろろん、
ねんねと遊びや、
鳥の日永が
わしや泣ける。

ねんね、ほろろん、
ねんねのお鳩、
島の日永が
わしや泣ける。

2

ゆたりゆたると、
正とら覺坊と轉まびや、

島の日永が
わしや泣ける。

ゆたりゆたると
岸うつ波よ、
島の日永が
わしや泣ける。

3

野
茨
に
鳩

のろりひよろりと、
阿呆鳥を追へば、
島の日永が
わしや泣ける。

のろりひよろりと、
逃げ出す鳥よ、
島の日永が
わしや泣ける。

机の上には、そのほかには無論何にも載せては置きませ
ん。ただ、その時その時に讀みたい書物を一冊だけし
じみと載せて置きます。たとへばサバテイエのブツシ
の聖フランシスコ傳とか、法華經とか、芭蕉句集とか、
時とするにサツフオ詩集とか、菜根譚とか。それらほ
んな私の靈を温めてくれるいい書籍です。さうして私の
靈を心からすがすがしいものにしてくれます。

「お花畑の春雨」より。

野茨に鳩

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。

春はふけ、春はほうけて、
古ぼけた草家の屋根で、よ。

日がな啼く、白い野鳩が、
啼いても、けふ日は逝つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろろん、
おお、ほろほろ。

庭も荒れ、荒るるばかりか、

人も來ぬ葎が、蔭に、よ。

茨が咲く、白い野茨が、

咲いても、知られず、散つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろろん、
おお、ほろほろ。

何を見ても、何を爲てもよ、

ああいやだ、寂しいばかりよ。

椅子が揺れる、白い寝椅子が、

寝椅子もゆさぶりや折れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろろん、
おお、ほろほろ。

日は永い、真晝は深い、

そよ風は吹いても盡きずよ。
 ただだるい、だるい、ばかりよ、
 どうにもかうにも倦んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
 おお、ほろほろ。
 空は、空は、いつも蒼い、が、
 わしや元のいんのかのこの夢だ、
 世は夢だ、野茨の夢だ、
 夢なら、醒めたら消えて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
 おお、ほろほろ。
 氣はふさぐ、かは重い、
 おおままよ、ねんねが小椅子よ、
 子供げて、揺れば揺れよが、
 溜息ばかりが揺れて了ふ。
 おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
 おお、ほろほろ。

昨日まで、堪へても来たが、
明日ゆゑに、今日は暗し、よ。
人もいや、聞くもいやなり、
それでも獨ぢや泣けて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。

心から、ようも笑へず

さればとて、泣くに泣けず、よ。
煙草でも、それぢや、ふかそか。

煙草も煙になつて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ

春だ、春だ、それでも春だ。

白い鳩が啼いてほけて、よ、

白い茨が咲いて散つて、よ、

かうしてけふ日も暮れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ。

日は暮れた、昔は遠い、

世も未だ、傾ぶきかけたよ。

わしや寂びる、いのちは腐る、

腐れていつかと死んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ

ほろほろ、ほろろん、

おお、ほろほろ。……

雀をどり

雀、雀と蔑おとしめしやんな、え、

どうせ、しがない雀ぢやとて、よ、

せめて歌はにやこの日が経たたぬ。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん、りやん。

せめて歌うたう日は経たうけれど、え、
 一羽一羽ちや寂しうてならぬよ、
 連れ衆よびたや、誰か友ほしや。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん。

せめて二羽なら慰みませうが、え、
 馴れてしまへば夫婦もいややよ、
 寂し、うるさし、辛なるばかり。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん。

寂し寂しで世はわたられず、え、
 頭うたままるめて澄ましてゐよとよ、
 空ちや寒風さむかぜ、また、笹の雨。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん。

笹にふる雨、夜のみぞれ雪、え、

よしや堪へましよ、堪へてもゐよがよ、
しんぞ心が、じつ、ままならぬ。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん。

昔思へば日に日に疎し、え、

明日思へば日に日に暗し、よ、

せめて今日だけ、踊りませう、踊ろ。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん。

せめて今日だけ、踊りませう、踊ろ、え、

泣くに泣かれず、笑はうにやわびし、よ、

どうせ、この世は苦の娑婆、地獄。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん。

踊り惚れても、何故氣が浮かぬ、え、

ままよやけくそ、様抱き寄せて、よ、

いつそ死のかよ、死ぬまで寝よ。

ありやせ、こりやせ、
ありや、りやん、りやん、りやん、りやん、りやん。

それも氣まぐれ、生れうと死のと、え、

どうせ獨ひびぢや、誰でも一羽、よ、

どちら向いても笹藪小藪。

ありやせ、こりやせ。

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん、りやん。

どちら向いても笹藪ばかり、え、

空は高いし、地面ぢまは暗し、よ、

昔や遠いし、足腰やたたず。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん、りやん。

命や短し、どうなるものぞ、え、

ままよ踊らにやこの日が経たぬ、よ、

さあさ、踊りませう、雀のをどり。

ありやせ、こりやせ、

ありや、りやん、りやん、りやん、りやん、りやん。

圓光の智者

『神を愛し、永遠の眞理を信ぜんとする者は先づ凡て
を知らざるべからず。大智は大慈の母なればなり。』

レオナルド・ダ・ヴィンチの言葉

圓光の智者

常に正しく目ざめてゐた彼、常に閑かに觀じた彼、彼
こそはその眼でその心で觀た、澄みきつた靈魂の眼
で、玲瓏とした心の鏡で。——まさしく大圓鏡智の人、
おお、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

虚と實とは裏おもて、實こそは美しい夢へ通ふ洞門、醒めつつ常に夢むその夢こそは知られざる真理の胎盤。—— おお、その真理の探求者、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

自然は宇宙は彼に教へた。彼はただ畏み眺めた、限りなき蒼穹のアーチを、太陽を、月を、星を、地球のかたちを。物の遠近、色の濃淡、人體の諸機關の智恵、凡ては整つてゐた、微々として而も無窮な生命のかがやき

—— おお氷遠の嬰兒、更に細緻の老熟者、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

叡智こそは無上の瞳、愛は識るによつて深み、美は愛によつて擴がる、而も最上の美は最高の眞、神祕と幻法とは最奥の華。まさしく科學と藝術との融會、肉と靈との放電。—— おお、その放電體、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

銀のコンパスと栗鼠の毛の畫筆と。彼は信じた、飛

行の可能を。彼は捉へたモナ・リザの深い微笑を。神を試みるもの、過去を現實に、未來を今に、さうして不可見を可見へ。——おお、因習の破壊者、世に云ふ僭上の忘想者、美の崇敬者、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

彼は認めた、彼の「最後の晩餐」の基督の面持を、相を、かうがうしき、またあはれに人らしく孱弱なる、善と悪と、美と醜と、神と人とを。おお、圓光のかげの闇、闇の金環。彼の見た何れもが謬りで無かつた。——おお、大

悲にして沈靜なるレオナルド・ダ・ヴィンチ。

避けず、恐れず、真正面に觀得るその人こそは、無上の諷刺者、また藝術の鍛錬者、冷酷の慈悲、温情と冷眼。おお、彼はただ觀るごとく畫く。怪しき骸骨の踊こそは熱狂せる説教僧。また毛むくぢやらの土龍、腐れ菌の唇こそは酔ひどれの無氣味な老婆——おお、辛辣なる洞察者、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

俗世の王、虚偽の莊嚴、空華の淫樂、凡ては一つ一つ

に彼の前に滅びて去つた。——彼はただ求めた、虚無にして絶対の眞理を、不變の變を。——おお、大勇の絶對者、知識の權化、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

夢に飛ぶもの、塵取り箒に跨る小娘、深夜の煙突より黒山羊の背に飛び移り駈りゆくもの、彼等の嘲わらひこそは奇怪に響け。また詐術の練金師、赤い四角帽の教授達、煩瑣學派、または固陋の神學者、彼等にこそは禍あれ。靴屋、鞣工、無智の馬丁は縦し彼を罵ると

も眞の魔法は究極の正法、不可思議の思議。——おお、光あれ、榮あれ、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

熊蜂と蒼蠅とは金色のランプに跳ねよ。庭には毒を注がれた紅い桃が實る。運河の幾何學的なる既に彼の頭腦に劃られ、とどろく彼の心臓にはまた臼砲とその運搬車とが澄みの据わりに軋る。翼あれ人よ、人よ、あらゆる宇宙の境界を乗り超えて高く飛べ、巨大なる白鳥。——おお、唯一の科學者、發明者、建築技師、畫家、彫刻家、最勝の智者、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

素朴と誠實と、飾りなき彼の靈魂こそは常にその半眼の微笑を尊くした。金色の髪と深々と垂れた眉毛、長い顎髯、黒の帽子と黒びろうどの上衣、暗紅色のマント。——快活で閑雅で、はきはきした、而も奥知れぬ瞳の持ち主、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

おお、時代の先驅者、あらゆる文化の父、而もあまりに大きかつた未完成の母體。永遠の孤獨。識られず、解

されず、その弟子からすらも裏切られた第一人者——
おお、高い寂しい老境のレオナルド・ダ・ヴィンチ。

凡てを生み、棄てられ、忘れられた、曉の明星。來るべく來つた地球の正午に於て、早くも響く背後の歡呼は、ただきけよきけよ、ミケランジェロよ、ラファエルよ、ミケランジェロよ、ラファエルよ。——おお、あまりにあはれだ、あまりにおそろしい。大智者の最後も追つて來たのだ。圓光のかけの闇、闇の中の金環、レオナルド・ダ・ヴィンチ。

水墨集解説

昨年夏私は詩集「觀相の秋」を上梓した。然しかの集は詩文と長歌體の詩篇を収めたものであつた。本集は主として短章を輯めた。而も純粹に詩集としては本集こそ「白金の獨樂」以來のものである。「白金の獨樂」以來、いろいろな事情の下に私は單行の詩集公刊の機會を失つて了つた。三崎詩集「烟の祭」その他がそれである。綜合詩集には兎に角收拾は爲すが、單行詩集の氣品はまたさうした別種の味があるので、何となく濟まぬ心もちで今日に到つたのであつた。

小唄、民謡、童謡集はその前後を通じて可なり公刊したが、「烟の

祭以後、私は主として短歌の製作に専心したので、純粹の詩作は極めて少なかつた。葛飾、動坂で少々、小田原お花畑で少々、天神山の生活で觀相の秋ぐらゐのものであつたらう。

十年の十月、突然に感興が湧いて落葉松第二十五章の詩が成つた。これが動機となつて私は再び新に詩へ還つて來た。それ故に特に落葉松數章は私にとつて忘るべからざるものとなつた。

その後、今春にかけての作が本集の大部分を占めてゐると云つていい。

但し、葛飾以前のものは全然切り棄てて、その當時よりお花畑へかけてのもの若干を綜合詩集より抜き、それに民謡童謡中の新作での極めて特殊なもの若干が加はつてゐる。

これが此の「水墨集」である。私としては久しぶりの大詩集なので、

かの「邪宗門」發刊當時の歡びを再び爲る感慨がある。

本集は主として當時の感興を形に残して置きたいと思ふ心で編した。たまたま民謡童謡等の雜居をも許したわけであるが、本集の全體を通じて私の所謂水墨風の精神、または私自身の今日の境涯といふものが相當に一貫してゐるものと信じてゐる。従つて本集は本集として他の詩集とはまた違つた相當の特殊相が歴々と今日の私自身を示してくれるであらう。

各章に亘つて簡単に解説すれば……

藝術の圓光

此の一篇の詩論は大正十一年九月雜誌詩と音樂の創刊號に載せたものである。

4 詩に對する、あれは私の見地なり悲願である。委曲を盡せばまだ
盡くせるとは思ふが、究極するところあれだけのものとなつて了ふ。
省みれば羞耻が深い。

雪に立つ竹

屋前屋後の竹林は、冬はいよいよ私に親しいものであつた。これ
は次章「水墨集」以後、十二年二月作、翌月「詩と音楽」所載。

水墨集

十二年一月十二日の夜より十七日までの作全部である。その數五
十九篇。翌月の「詩と音楽」に載せた。

これらは本集の中樞たるべきものになつた。私としても此の感興

は珍らしいものであつた。

外に「小景」二篇がある。これは動坂時代の舊作であるが、それらと
相似た傾向を既に示したものの一つとして、之に加へた。

虎の煙草

「虎の煙草」は十一年十一月に作つた。十二月の「詩と音楽」に掲載。

その他は同じ感興の續きで成り、雑誌「女性」十二年の新年及び二月
號で発表した童謡六十篇の中から抜いた。

民謡「この子あの子」は十一年一月に成つた三崎の民謡中の一つであ
る。(民謡集「日本の笛参照」)

5 兎に角、これらは私の詩で表現されるものと根は一つである。こ
れらの童謡は子供には六つかしいかも知れぬ。かういふものも詩の

6 感興の流れの中で、自然にかうした表現で出て来て了ふ事がある。こだばらぬがいかも知れぬ。

芙蓉の季節

この中の九篇は十一年の晩夏、この庭の芙蓉の季節に成つた。「詩と音楽」十月號に掲載された。

「夜の二時」は極めて印象風に書いて見た。私としては變り過ぎるくらゐ變つてゐる。ほんの一寸した試作と見てもらへばいい。

縁の黎明

前章より一と月前に成つた。ここで私は私の殻を一枚脱ぎ變へたと思つてゐる。十一年九月の「詩と音楽」創刊號及び「詩と版畫」で發表し

た。

尤も、童謡「雨の樋」「鶉」は十二年二月號の「女性」へ載せたものの中から抜いた。

月光微韻

十一年六月のある月夜海に見える書齋の露臺に獨しづかに黙想に耽つてゐて、何か迫り来る或る陰影と光とに驚かされて突然に此の感興が湧いた。その二十八章は翌月の「明星」に寄せた。その中から改めて二十一章を抄した。それに若うして逝つた月に開く窓の詩人高嶽佶祐君への吊詩一章を添へてゐる。

7 「詩と音楽」に委しく書いたから、ここでは別に細説せぬ。
かの未知の年少詩人と私の交霊關係については、十一年十月號の

動き来るもの

「朝」より「鶴鶴」までは「落葉松」と同時の作。「葛の枯葉」以下はそれに引きつづいての作。

初冬の星

「弦月三章」「秋色二章」は「落葉松」と同時の作。「初冬の空」數篇はその翌月の作。何れも「明星」所載。「冬の裏山」は「初冬短曲抄」とともに主として十年十一月の百篇に近い民謡の感興に前驅して成つたものである。十二年新年號の「中央公論」に寄せたものの中にある。

「焚火」九篇は「初冬の空」と同時の作。

「かまの實」は同じ頃の作。「返り花」だけは前述の本年の「女性」二月號所

載中の一つ、童謡の感興中に成つたものである。童謡の埒を超えてある。

落葉松

「寂心」は「落葉松」と同時。ここで私は従前の殻を一つ脱ぎ變へてある。「ふる雨の」以下は十一年三月の作。同じ感興で書いたので同じ形式になつて了つた。

麵麴と薔薇

「麵麴と薔薇」「ほだかみ」「ある時」「涙」は大正七年本郷動坂にての作。「棗の花の」「こども」は葛飾生活當時、六年作。「白芥子」より「すすし」二章までは前章の「ふる雨の」等と同時の作より

抜いた。十一年四月の「明星」に寄せた。この時の感興は一夜にして五十八章を成したので形式に於て一律で、いささか馴れ過ぎた形がある。

「にぎりめし」以下の童謡は前述の十二年二月の「女性」掲載中のものである。私の童謡はここで少くとも以前の殻を脱ぎ變へてある。何か新らしく轉換しさうになつて來た。

この一章には人生と藝術とについての、所謂麴麴と蒼薇風のもののみを輯めた。

初冬短曲抄

近世の小唄風のものその他を輯めた。これは前に述べた「冬の裏山」と同時の作。この感興の流れが終に私をして民謡數十篇を成さした。

後のそれらは民謡集「日本の笛」に收めてある。

薄陽の旅

「桑の薄陽」より「郷愁」まではむしろ民謡體の詩である。これらは私の短歌にも通ずるものがある。境地は一つだからである。前章に引き續いた民謡の感興の中に交じつて來たものである。これらは主として十一年の二月頃に成り、四月の雜誌「大觀」に載つた。尤もここにはその中からそれぞれの章で抄出した。

「島の日永」は同時に成つた小笠原民謡中の一つであるが、當時の自分の生活そのものを歌つたものの中の、自分に最も忘れられないものである。これは三章になつてゐるが、三章で一つのものとなつてゐる。連作のそれではない。

野茨に鳩

これは大正八年、小田原お花畑にての作である。民謡體ではあるが、私のあの頃の生活なり思想なりが、そのまま出てゐる。矢張り私のものだと思ふ。「白秋詩集」等に採録は爲すが、本集に無くてはならぬものであるから載せた。

圖光の智者

これは私の詩文の一つである。あながちこれを詩とは云はない。然しまた散文の書式に書き下してあるからと云つて、ただの散文と同じだとも思はぬ。見る人々の心々にまかしたい。「水墨集」と同時の作、同時に「詩と音楽」に掲載。

その他

本集中に一題で數章の詩がある。それらは一章一章に獨立して而かも連作の體を帯ぶるものである。一つの詩の一聯一聯ではない。

この例にまづ「落葉松」がある。

なほ前に云つた民謡「島の日永」だけは例外である。

「白秋パンフレット」について

「月光微韻」「落葉松」「初冬の星」「動き來るもの」「薄陽の旅」「雀の頭巾」等、「白秋パンフレット」として、眞にアルスより刊行したものである。本集のそれらはその中から抄出したので、それ以外のものを見たい人はパンフレットに依らねばならない。「初冬短曲抄」は「雀の頭巾」

14 の中に収めてある。

「觀相の秋」について

本集を讀んで下さる方は前集「觀相の秋」をも併せて更に讀み直してほしいと思ふ。双方相通する一つの精神があるからである。同じ流れのものだからである。

大正十二年六月七日記

跋

私は境涯の詩といふことを考へてゐる。詩はそこまでゆかなければ眞の個性の表現とは云へまい。その人その境涯あつての詩であり、さながらの表現なる故に不二のものとなる。これをゆるかせにすべきであるまい。

1 在りのままに在らせてもらふこと、この忝さに私は禮拜す

る。自然への随順、實相觀入、この所念は幾度も私が云つた。まことに正しく高く常に度ましき觀相こそは尙ばるべきである。境涯の詩がここより生れる。

私の今日の詩は寂しい。ほとんどは水墨の筆觸である。而も私は實相の新鮮さに常にうたれる。ただ水墨を以て現す私の詩の精神はかうあらねばならなくなつて來た事に於て、今の私としてはこの外の途は無いと思つてゐる。無論私の水墨には、曾ての丹青に用ゐた同じ一本の筆を以てするが故に、底には從來の着色が複雑してゐる。單なる抑からの水墨では

3
あるまい。それだけが或は幾分の豊さを示してくれないともかぎらない、とも微笑される。私は本集に名くるに水墨集を以てした。然し、芭蕉の所謂、西行、宗祇、雪舟、利休、或は南畫の王維、大雅、竹田等の閑寂境に強ひて己れを遊ばしむる心では無い。おのづからそれらに貫通する同じ精神にまで苦しみ苦しみに到りついただけのものである。自ら省るにそれは趣味とか才智とか云ふにはあまりにほんたう過ぎる。今の私はかうした詩の表現でなければならなくなつて來たのである。

私の詩風も随分と變遷した。今日に於て、かの「邪宗門」「思ひ出」の狂騒時代を思ふと、あの目まぐるしい絢爛さは何處へ行つたかと思ふ。然し今さらあの青春時の詩風に還らうとは思はぬ、還れも爲ない、また還つたところでそれは偽るものである。兎に角私は此處まで到りついた。それは人としても詩の道を行ふ者としても可なりの悲惨な複雑な曲折を経てやうやうに辿りついたのである。今日の私は無論昨日の私を遙かに振り返る點まで隔つて來てゐる。(これを眞に知つてくれる人は少い) 思ふにあの頃の詩風はあの頃ではまことにさうあるべきであつた。その意味で今日の境地も今の私として

はこれより外には無い。詩の香氣にも様々の種別がある。寂しければ寂しいままに、何等かの、それは曾て見なかつた、却て本質としての特殊な氣品は保たれるものであらう。ただそれがおのづからのまことのものか否かで詩としての價值は極るのである。兎に角その時代時代をひたぶるに生かしきるものにこそ眞の恩寵を見、生かしきつたものにこそ最後の歡呼は聞かされるであらう。生かしきりたいものである。

私は詩の究極としてはその圓光の貴相を思慕してゐる。聖なる絶對の境涯だからである。然しその圓光なるものも他よ

り初めて瞻仰する事であつて、彼等古聖たち自身はそれ自らの圓光については何等の知るところが無かつたであらう。虚心坦懐であつたらう。さうで無ければあれほどの奕々たる神采は拜めないにちがひない。況して私ごとき鈍根者にはただかの絶對至妙境を思慕する事によつて、幾分でも自己の下凡を救ひ得ようかと願つてゐる。我自らの圓光などは考ふるさへ恐懼すべき事である。世には私の詩論を正しくは讀まうとも爲ない多くの評家を見るが故に、愚かな私は常に本然の微笑さへも鎖されがちである。

要するに私は私である。私はただ私の境涯さながらの詩を願ふ。此の所念は一の禮拜である。

大正十二年六月

白秋識

目次

序に代へて

雪に立つ竹

雪に立つ竹……………三

雪後……………六

雪煙……………九

雪後の曇り……………一〇

雪後の聲……………三

冬至前後……………五

水墨集

千利休	南畫中の半日	小景	露	銀杏	茶の花	詩作のとき	童と父	白菊	竹田	水墨牡丹	虎
.....
三	六	六	六	五	五	四	四	四	四	四	四

耀くもの	鷹	木のあたま	夜雨來る	晩涼	林泉の空	竹里館	王摩詰	老子	蘭亭の遊び	李思訓	竹林の七賢
.....
四〇	元	七	六	四	三	三〇	二六	二六	二四	三	一九

雪	雪溪の氣品	雪中思慕	雪中の芭蕉	山峽の良夜	王維の雪景	雪江	蘆雁	時雨	短日	鯨の來る頃	冬晴
曉
九	七	六	四	二	〇	八	六	四	二	〇	六

終日風あり	山岨	渡り鳥	寒山拾得	函嶺消息	枯野	枯木	落葉	境涯の讚	翁會	句至	冬至
.....
七	五	四	三	二	二	六	六	七	六	五	四

やや遅い月の出……………101
 曉 閣……………101
 満月の入り……………104
 ある初冬の朝……………106
 白 虹……………108
 寒梅餘香……………110
 潮鳴の夜……………111
 早春の夕景……………113
 我 子 に……………115
 金屏の歌……………117
 初 蛙……………119
 江 の 島……………121

虎の煙草

象 の 子……………125
 片眼の象……………127
 田舎のお午……………129
 馬 の 顔……………131
 物臭 太郎……………133
 この子あの子……………136
 紅い蝶々白い蝶々……………136
 虎の煙草……………140
 芙蓉の季節……………
 初秋の朝飯……………144
 初秋の庭……………147

初秋の空……………一五〇

山寺の初秋……………一五三

庭の一部……………一五五

葉鶏頭……………一五七

初秋の夜……………一五九

夜の二時……………一六三

緑の黎明……………一六五

雨の樋……………一六五

雀よ……………一六九

朝……………一七一

朝めしの時……………一七三

月光微韻……………(二十二章)……………一七九

雨上り……………一七四

浅宵……………一七六

祭のまへ……………一七八

祭……………一八二

祭のあと……………一八四

ある宵の童心……………一八七

鶉……………一八八

夏野……………一九〇

かなかな……………一九一

蜂の子……………一九二

動き来るもの

朝 二四二

風 二四三

晝 二四六

寒竹の 二五一

雀 二五二

鶺鴒 二五四

葛の枯葉 二五六

蘇枋 二五六

薄陽 二五九

栗鼠 二六〇

初冬の星 二六〇

初冬の空

大 山 二四三

丹澤山 二四四

冷めたき 二四五

篠原 二四六

冬の裏山 二四七

やどり木 二四七

櫟原 二四八

薄日 二四九

松が根 二五〇

山みち 二五一

岩 二五二

弦月三章 二五三

麵麩と薔薇

ふる雨の……………二七六

啼く蟲の……………二七八

露……………二八一

麵麩と薔薇……………二八五

はだかみ……………二八七

あゝる時……………二八九

涙……………二九一

棗の花の……………二九二

こども……………二九三

白芥子の……………二九五

あそび(其の一)……………二九六

落葉松

初夜過ぎて……………二五三

さむざむと……………二五四

小夜ふけて……………二五五

秋色二章……………二五六

みそささい……………二五六

もみじ……………二五七

返り花……………二五八

焚火……………二五九

かやの實……………二六四

落葉松……………二六七

寂心……………二七三

あそび(其の二).....101
 童らは.....104
 わがうた.....107
 おろかしく.....110
 孤獨.....111
 つつましきけしきの底に.....113
 とりどりに.....114
 こころ急く人に.....115
 木の馬.....118
 螢.....119
 餓ゑたるもの.....120
 寢姿.....121

初冬短曲抄

すすしさ.....122
 にぎりめし.....124
 お米の七粒.....125
 フランシス上人と雀.....126
 ぐるぐる廻り.....126
 アントニオ上人と魚たち.....127
 初冬短曲.....128
 かやに.....129
 けやき.....130
 色の黄なのは.....131
 登は.....132

薄は……………三三九

松の生木で……………三四〇

からまつは……………三四一

どんぐりの秋……………三四二

かやの實ひろひ……………三四三

どんぐりばかり……………三四四

薄陽の旅

桑の薄陽……………三四七

笹の葉明り……………三五二

時雨日和……………三五四

小諸……………三五八

島の山中……………三六〇

郷愁……………三六二

島の日永が……………三六三

野茨の鳩

野茨の鳩……………三六九

雀をどり……………三七七

圓光の智者

圓光の智者……………三六七

發行所
東京
銀座
尾張橋
町區
發
了
ル
ス
電話
振替
東京
二四
八八
八番



印刷日五十月六年二十正大
行發日八十月六年二十正大

秋白原北者作著

著者代スルア社會會合
雄鐵原北者行發
號五地新町張尾座銀區橋京市京東

一專堀者刷印
地番八〇一町聖久區川石小市京東

川小本製

水
墨
集

定價
參圓五拾錢

白 秋 氏 著 書

白 秋 詩 集 一 卷

定 價 貳 圓 八 拾 錢
送 料 拾 七 錢

白 秋 詩 集 二 卷

定 價 貳 圓 八 拾 錢
送 料 拾 七 錢

詩 集 觀 相 の 秋

定 價 壹 圓 八 拾 錢
送 料 拾 七 錢

小 抒 詩 情 わ す れ な く さ

定 價 壹 圓 八 拾 錢
送 料 拾 參 錢

白 秋 氏 著 書

歌集 雲母集

定價 貳圓參拾錢
送料 拾七錢

歌集 雀の卵

定價 參圓八拾錢
送料 貳拾七錢

歌集 北原白秋選集

定價 壹圓五拾錢
送料 拾壹錢

撰歌集 第二木馬集

定價 壹圓八拾錢
送料 拾五錢

白 秋 氏 著 書

白秋小唄集

定價 壹圓八拾錢
送料 拾參錢

民謡集 日本の笛

定價 貳圓八拾錢
送料 拾八錢

白秋小品

定價 貳圓
送料 拾七錢

歌話 洗心雜話

定價 壹圓八拾錢
送料 拾五錢

白秋氏童謡集

童繪
論入
とんぼの眼玉

定價 壹圓九拾錢
送料 拾五錢

童繪
論入
兎の電報

定價 壹圓九拾錢
送料 拾五錢

童繪
論入
祭の笛

定價 貳圓八拾錢
送料 拾七錢

童英
論國
まざあぐうす

定價 貳圓八拾錢
送料 拾七錢

